趣味と興味

ることが出來ると思ひます。勿論、此の足利時代室町時代は、後の江戸時代德川時代と云ふ非常に盛な文學の時期を形造くる、其の萌芽を有して居る點に於いて、大に注目すべき時代でありますけれども、それは、文學の相對的意義、即ち、文學の歴史から言つた値打でありまして、文學の絶對的意義からではありませぬ、其の者の値打から云へば、如何に辯護しても、此の時代は、文學の衰退時代と云はなければなりませぬ。今、その、實際について、少しく申して見ませうなら、まづ、想像の缺乏して、趣味が少くなつて來たと云ふことは、言ふまでもないことでありまして、社會の變遷に隨つて、自然と世の中が無學になつて來ましたから、思想の開發につれて或程度まで開發する所の想像、從つて、文學的趣味も、索然となり、茲に趣味に代るに、小見らしい興味が、增長して來たのでありました。是は區別しなければならない事です。文學の値打は趣味にあつて興味にはありませぬ。もつとも、趣味が十分であつてその上に興味が乘ねであれば、それを越した結構なことはありませぬが、趣味を捨て、然も無學な小見らしい興味だけに便ることは、最も文學の本領を傷けるも

のと云はなければなりませぬ。たとへて申すと、鎌倉以後の和歌に於いては、第八代目の勅撰の新古今集によつて、內容の欠を補つた形式の一特色を見たのでありましたが、其の後、九代、十代となつてからは、定家卿の前後三代、和歌所を預つたによつて、和歌の權力は一に其の子孫の手に歸し、和歌が天才による一種の詩作たるを知らない無學輩は、皆擧つて定家の末流に降服して、其の家の不自然を最もよきものとして遵奉する事となりました。このあるべき筈の無い規定に合しやうなどとつとめるのは、既に興味の第一歩と言はなければなりませぬ。「月やあらぬ」は業平の歌の初句にあるから、初句に用ゐてはならないとか、「ほの〳〵と」は、人麿の句であるから、使つてはならないとか、やかましい事を云つて、悉く形式論の極端を濫用し、其の規矩に遵當することを、何よりの手柄に思ひ、さて是が甘く云へたなど贊嘆するのは、唯、言語の弄びに止つて、讀者の趣味心には何するものでもありませぬ。「梓弓」と云へば、必ず、「はる」とか、「いる」とかの緣語の有る無いを批評する。「旅衣」と云へば「着る」とか、「たつ」とかの係り具合を求めると云ふので、秀逸と云ふは、唯、その語

がうまく用ゐられたかどうかとの興味にあるので、其によつて色々の連想を思ひ浮ばしむべき、趣味想像の問題には、とんと關係が無いと言つてもよい。其の甚しいのになると、餘りに興味に忠實なが爲に、趣味を害してるものの多いのは、憎むべき事であります。彼の阿佛尼と云へば、定家の子爲家の室、二條家冷泉家の分れる母人でありまして、當時には重きをなす人でありましたが、其の作十六夜日記中の和歌を見ますと、實に下らないものが多分を占めて居ります。その醜なる所以も、興味の害毒を以つて、優に說明し去ることが出來るのです。其の一二について見ますなら、

こと問はん背と足とはあかざりしわが住むかたの都鳥かと

何と下らない歌ではありませぬか。「背と足とはあかざりし」などは、俗臭紛々、誦して嘔吐を催すの感があります。此を阿佛尼が得意になつて、「隅田川わたりにこそありと聞きしかど都鳥といふ鳥の背と足と赤きは、この浦にもありけり」なんぞと、詞書をして居るのは、業平の「名にし負はば」の歌を換骨したといふ事と、背と足とは赤いを飽くに係けたといふ事とが、興のあるのであつて、歌そのものゝ內容は、ちつともあはれとも悲しとも、心を動し、趣味心を充するに價して居りませぬ。或は

一の宮名さへなつかしふたつなくみつなき法をまもるなるべし

もし、一の宮の意義に立ち入つたら、毫もそんな連想を起さしむべき性質を持つては居りませぬが、其の數字から、法華經の唯有一乘法無二無三の功德を、引き出した所が興あるとだけのことで、他に何等の趣味もありはしませぬ。阿佛さへ既に此の如くであります。すれば、他は推して知るべしであります。その外、向ふからよこした歌の返しとしては、其の下の句を上の句として、詠んでやるとか、或は、殊更に古歌の裏を表して詞を成すとか云ふ事をさも手際の樣に心得て居るのは、趣味の上から云へば、眞に詰らないのでありますが、趣味の枯れた當代には、是非、こんなあさましい事で、補を一無意識的ながら一附けなければならなかつたものと見えます。即ち、それが、趣味に代るに興味を增して來たので、其の興味は、文學の本領たる所の想像ではなくして、意思の二つの働でありますから、文學の本領を既に離れて居るものと云

はなければならないのです。

此の文學の趣味を下して、興味の世界となしたものに、凡そ二つの道筋があると思ひます。それは、一は、平安朝に内容を離れて、形式に走つた和歌の趨勢が、新古今以後其の極端を飛ひ越し、形式の趣味もを忘れて、形式として其の形式を遵奉するに至つたこと、他は、一般の無學に伴つて、趣味の沈滯した所へ、更に興味を起さしむべき理想が、敎へ込まれたことであります。其の興味を起さしむべき理想とは何んであつたかと云へば、前に長々しく申した所の佛敎であります。是は、此の時代に於て、最も注意しなければなりませぬ。既に文學趣味が、かれ〳〵となつてしまつても、尙、人の心を收攬するに足る作物を出さうとには、是非、何等かの興味を起させる題目なり、筋なり、詞遣なりをしなければなりませぬ。卑近な例でありますが、茲に一つの美術品商賣があると致しますか、もし、その實質が充分で、其の出來ばえも高尙であれば、事件がありませぬが、何等かのわけから、實質のよいものを出す事が出來なくなれば、必要上止むなく、金の天浮羅か、彩色の眩惑でもつて、田舍ものゝ目を

瞞着する樣になります。―これは、和歌の形式に走つたのにも當りませう。―所で、其の墮落がだん〳〵進んで來ると、其の金を着せる術も拙になり、青黄赤白の色を美しく配合する事も覺束なくなつて、次第に店から御客が減つて行くとなる。今は爲方がないから、實質が惡くとも、亦は技術が拙くとも、何か人間の好奇心に訴へて、之は歌聖人麿の歌を摺りこんだ何具であるとか、これは定家の小倉山莊をあらはした何ものであるとか、乃至は、何經文の意を取つて作つたとか、何寺の何菩薩に型どつたとか云つて、極めてまづい見つともないものも、有難がらせて買手を作るに至りませう。それを、此には斯く〳〵の理由有るによつて、好むべき心を起すのだとても云つた樣な譯で、趣味眼の低い素封家などが、續々珍器を買ひ込みます。猶も扨子も、それをよい事にして羨ましがる、これが興味の命でありまして、此の興味に、内容の方から標準を與へたものは、即ち佛敎の信仰及び、迷信であります。其の佛敎の中でも、どんな思想が主な敎導者であつたかと云ふと、第一は淨土敎の思想、第二は眞言密敎の思想、それに第三は禪宗であります。而して、其の狀態を最

もよく示して居るものは、多數の謠曲と御伽草子の一部とであります。和歌は、もう、此の時代には御話になりませぬ。

遷に、平安朝時代に、最も盛であつた物語が、次第に衰退して來て、其の後鎌倉時代になつては、文學的讀み物を以つて心を喜ばせるよりは、目で見て、どんな者にも分るやうな繪卷物と云ふものが段々盛になり、其に僅の圖解樣の文章を添へて、上流者の間に行はれたのであります。さて其の內容題目は、どんなものであつたかと申すと、もと、物語文學の物語繪となつたものですから、源氏物語や、竹取物語や、或は紫式部日記やを、そのまゝ繪にしたものもありましたが、其の多分を占めて、最も勢力のあつたものは、佛敎の功德を敘した寺社の緣起であります。—もう、平安朝の末から起つて居りますが、—華嚴緣起、信貴山緣記であるとか、或は、北野天神緣記、當麻曼荼羅緣起であるとか、或は、春日權現驗記、石山寺緣記であるとか云つて、いづれも、佛樣がどう云ふ御利益を與へたとか、或は、なんと云ふ高僧がどんな事をしたとか云ふ、有り難い事を敘べた話、—或者が毘沙門天王を信仰して、金持にして下さいと祈つた所が、滿願の日に天から米の俵、黃金の俵が降つて來て、忽ち大變に富み榮えた。然るに其の男が、段々慢心を起したゝめ、其の米の俵や黃金の箱がいつの間にやら藏の中から、天外に飛去つた。そこで非常に悔悟して哀を乞ふた所が、毘沙門天も夫をあはれと覺して、元の通り金持にして下されたと云ふやうな、實に子供だましの話—即ち、これが、緣起繪卷であります。之を讀んで心に喜ぶ所は、想像の豐さによつて、色々の連想を惹起す味にあるのではなく、唯、自己が有難いと思ふ毘沙門天を、其の男も念じた事、常に功果あるべしと信じて居た祈願が、果して福德を招き得たこと、自己の理想からは罪惡と見て居た慢心が、果して罪惡の報に逢つて、財產を奪ひ去られた事、及び悔悟の哀願によつて、佛天の慈悲があやまたず、凡夫の頭上にも下つた事等、其等が自己の欲する所に合して顯れてる、信仰的道德的の意思の滿足なのであります。さて、斯樣な、現世的利益を信奉させて、其の滿足を理想とする性質は、佛敎中の眞言密敎の思想でありますが、又、淨土敎も、それに準じて知ることが出來ませう。それは管々しいから今は略します。

御伽草子

それから、此の繪と繪ときとの兩方のうちて、文句の方の發達したものは、例の室町時代の末に現れたる草紙であります。此の一部には、既に、幼稚なる趣味の、これから發達する道筋を示して居るものもありまして、子供のよろこびそうな話やら、實世界の觀察に迂遠な人の、慰みとなる傳說やらを採つて、色々面白く書いた所もありますが、多くのものは、やはり、緣起類の性質のやうに、佛神の功德を布衍し、特殊の事件には、必ず、佛菩薩の力を說明して、興味を添えてないものはほとんど無いと云つてもよい位であります。

其の時紫雲たなびきて、異香四方にみち〳〵て、花ふり、不老不死の風ふきて、音樂の聲ひまもなく、廿五の菩薩、三十三の童子、廿八部衆、三千佛、皆いろめき、十六の天童、四天、五大尊、みな〳〵虛雲に充ち〳〵給ふ。是ひとへに、親孝行のしるしなり。(蛤の草紙)

なんぞと、混沌たる迷信をふり廻したり、

いよ〳〵是を見る人々、よく〳〵後生肝要なるべきなり。(子敎盛)

ひめ君は、なりあひの觀音とあらはれ給ふ。中納言は、九世戸の文殊となり給ひて、衆生を濟度し給ふなり。なりあひの觀音、九世戸の文殊の御本地すなはち此の御事なり。(梵天國)

文躰の粗雜

と結んで、抽象的理想に說明したりして居ります。以つて、當代の人心は、主に、迷信的興味によつて、滿足させられ、趣味の高潔、豐富なる文學の眞價を知らない、不幸の境遇にあつたものなことを知るべきであります。

繪卷物は云ふまでも無い事ですが、多少、その文學的發達をなした御伽草子、いま申した樣な內容の草子の文躰は、如何なるものであるかと云ふと、是は前に申した文學極衰の第二の條件の、蕪雜であるとの言葉を以つて、評し去る事が出來やうと思ひます。此の時代は、誠に無學な時代でありましたから、平安朝時代に、最も盛を極めた所の物語の其の言葉は、到底、後人の動かすべからざる、「オーソリチー」を有して居るもの、其の語そのまゝが、無限の有難みある言葉と、さう考へて、其のまゝに套襲することであつたのであります。此は、和歌の敎權と、殆ど同樣のもので、實に笑ふべく、憐むべき曖昧と云はなければなりませぬが、斯樣なことは、ひとり、室町時代ばかりでなく、現に、明治初

年の、文學に對する觀念の發達しない頃、頑迷もしくは迂濶な人には往々あり、此等の人は、自分ではずんと得意になつて居るが、はたから見ては、隨分滑稽なものでありました。今の新教育をうけたかたには、決して、こんな、死語と生語との別を知らない人はありもしますまいが、―もし、非常の天才によつて、死語を復活させる樣な文學者が出れば、めでたい次第でありますが、―此の時代に於いては一般に、迷夢の内に彷徨して、無學な、淺薄な、自分等の心をば、及びもつかない、源氏物語や伊勢物語などの中に用ゐられて居る言葉によつて、表さうと致しました。言はゞ、三つ子が、さる能辨家の口吻をまねて、片ことを言ふ樣なものでありまして、覺束ない名句のうちには、爭ふべからざる自分の言葉が這入つて來る、亦使ふべからざる所に、とんでもない仰山な文言が用ゐられてるなど、隨分と不都合極まつて居ります。例へば、自他を混じ、主客を顚倒し、動詞の時を無茶に使ひ、一文の首尾が完結せず、或は、目上の人に對して使ふ所の、「侍る」とか、「お在します」とか云ふ言葉を、目下の賤しい者に對しても用ゐて、上流人と下流人との言語に、毫も性格を見しむべき區別

史的意義

連歌

を設かないなど、數へ來れば限もありませぬ。殊に、

うちやましかげもかはらずすむ月のわれには盛れ秋の空かな

の歌はどうでせうか、中學校の生徒も、まさかにこんな歌は詠み出すまいかと思ひます。

斯く、文學其の者として見ますれば、今申した繪卷物、或は、其から發達したお伽草子は、殆ど價値の無いものではありますが、是が、次の時代に這入つて盛なる、德川の文學を興す其の源泉を示してると云ふ點に付いて、歷史家の注意を要することであります。即ち、お伽草子は、一面に、德川時代に於いて特色を發揮した所の、淨瑠璃の根源を爲して居り、他の一面に於いては、假名草子以下の、小說の根源をも爲して居ります。又、繪卷物の方では、やはり德川時代に盛なる小說の一種、草双紙に、何等かの模範を垂れて居るらしいので、文學其の者としては、値打の無いものでも、歷史上からは、大に注意しなければならない所があります。

後の文學の起源を爲す點に於いての、注意を申しましたに緣んで、やはり、此

片歌

の外に、徳川時代に盛になる文學の起源を爲したものがある事を申しておきませう、それは外でもありませぬ。和歌が衰頽し、又餘り形式に拘泥するに依つて、歌を詠むことがむづかしくなつたものだから、其に忌氣がさした連中が、其の束縛を脱しやうとして、趣いた所の連歌であります。連歌の起源は、連歌の集に菟玖波集があり、連歌の道を筑波の道などと申すによつても知れるやうに、太古、日本武尊が、東夷を御征伐なされた時に、甲斐の酒折宮で、新治筑波を過ぎて幾夜かねつる」と云ふ問を發せられた。すると、火燒の老翁がそれに御答をして、「かゞなへて夜にはこゝの夜、日には十日を」と答へた。それが起りであると俗に申してますが、なるほど、一句づゝ二人で詠歌する所は似て居るが、實は、これは、片歌で問答をしたもので、二人して一のまとまつた意味の歌を作つたのではありませぬ。—それに附加へて申して置きますが、奈良朝以前には、和歌がしば〳〵問答に用ゐられまして、上の如き場合には、片歌で問答をして居たのであります。片歌とは、五七七の形を云ふので、例へば、「新治筑波を過ぎて幾夜かねつる」と云ふ問を起せば、それに對して答をす

旋頭歌

長き連歌

るのが、また五七七の句を以つて、「かゞなへて夜には九夜、日には十日を」と云ふやうに歌ひます。此の片歌を二つ重ねて、五七七、五七七と云ふ、一つの歌にしたものは旋頭歌であります。—後に、万葉集の中に、大伴家持と尼との問答がありますが、あれなどは、まあ連歌と云つてよいかも知れませぬ。併し、本統に連歌と云ふ名目の出たのは、金葉集を以つて始と致します。それでも、尚、短歌の勢力に壓倒されて居りましたが、鎌倉時代の始には、上下二句の連歌を作るだけでなく、詩の聯句にならつて、上の句に下の句をつけて、又それに上の句を付け、又下の句を付けると云ふやうに、以上五十句も百句も作ると云ふことになつて參りました。されば、連歌は、勿論、室町時代に興つたと云ふことは出來ないのでありますが、それでも、教權重き和歌の勢を壓倒して、連歌の盛になつて來たのは、室町時代になつてからの事であります。二十一代集の一番終りの新續古今集は、師範家以外の飛鳥井雅世卿の手によつて撰ばれ、それ限にして勅撰集が絶えてしまつたのも、その以前、師範家たる二條良基によつて、菟玖波集の撰ばれたまでに勢力を得た連歌の、なせる業と見る

俳諧

事も出來ませう。所が、段々連歌にもむづかしい形式が起つて來、趣味はやはり、舊來の範圍を擴張しないかの慨があつたので、それでは、本旨に反くと云ふ意識が、あつたかどうですか、其に代へて、無造作な滑稽趣味を加へ、毫しも用語に拘束する所なくして、思ふ存分言ひ放つと云ふことになつて來たのであります。此の活動が、德川時代になつて、殊に特色を帶びて來たのでありますが、其の前驅として現はれたのが、山崎宗鑑や、荒木田守武で、それらが此の連歌を轉じて、滑稽趣味の附隨した俳諧となしたのであります。此の俳諧が、德川時代に這入つて、文學の盛な、殊に韻文の最も盛な元祿時代に、談林風を脱したる眞趣味のものとなりました。其を蕉風と名づけますのは、創立者の、松尾桃青、即ち、芭蕉翁であるからであります。後には正風と申すことになりました。彼の技倆は、「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」とか、「古池や蛙とびこむ水の音」とか、一句にして意義の完成する、所謂發句に於いても認めることが出來ますが、併し、彼の特色は、寧ろ、俳諧の附け合の妙にあるのであります。俳諧の文學の値打を申すのは、隨分手間取ることになりますから、此處では省きますが、一聯の俳諧を、二人乃至數人して拵へ上げる、言はゞ共作の美術品でありますから、多少は、その共作にも約束がありまして、花をどう配置するとか、月を如何に入れるとか、それ相應な規定になつて居るので、一方から見れば、不自然ではあるやうなものゝ、尙その規定を味へて見ると、餘程審美的になつて居て、面白い所がありますけれども、其の流弊に至れば、また談ずるに足りませぬ。

創作の減少

さて、文學衰頽の第三條件、創作の減少は、實際どんなであつたかと見ますに、當時、文筆の技が、廣く用ゐられて居りましたから、種々の雜史や日記が、人々の手によつて成りは致しましたが、それは文學とは云ふことが出來ませぬ。又、和歌に、南朝の新葉集などを取出てゝ言つて見ても、國民趣味の全般には、殆ど貢献する所の大なるものでもない。多少、連歌俳諧があるが、これとても前に申したのに盡きて、まづは御同樣と云ふべきてありませう。唯、謠曲と狂言とだけが、他に異つた特色を發揮してるものと云ふべきてありませうけれども、謠曲の數百番、聞けば驚くが、趣味の獨創と、形式の優秀とを求めたな

宗祖の文章

高祖遺文

らば、手に殘るは之が十分の一に上らうかどうてせうか。狂言とても、數十番一律の常套に陷つてるものが多いので、概して見るに、眞の文學作は、想像の缺乏、文躰の粗雜の多勢に占められて、室町時代にあらはれ得なかつたと云つて差支ありませぬ。謠曲狂言については、後の時間に改めて申しませう。

此の時代、及び、前の鎌倉時代に於いて、この外に注意すべきものは、僧侶の手に依つて成つた所の教義書であります。鎌倉時代に於いて、新らしい宗派が非常に勃興した事は、前に申しておきましたが、其の時代に、僧侶の手に依つて成つた所の、種々の宗教上の書き物があるのです。殊に、其の書き物で、最も面白いのは、御題目宗の開祖たる日蓮上人の著作であります。彼の宗内では、高祖遺文として編纂して居ります。もとより、それは、文學として書かれたものではない。即ち、國民趣味其の儘を叙べたものではなく、從つて、國民一般の同情を得やうとした所のものではないのでありますが、併し、又、文學として見て、大に値打のある性質をも帶びて居るのであります。文躰はなか〳〵強い力をもつて居りまして、和漢混交文の上乘たる戰記物の文學よりも、更に一層力強き姿を持つて居ります。これは、信仰の熱誠に起因するもので、其の內容は、傾向的の理想に重きを措いてあるのですけれども、往々、普通趣味の出沒するものが、認められないでもありませぬ。私は、明治の今日の樣な、淺薄な趣味だけに限られてるものゝ極端として、純文學ならぬ此等の作物を、玩味理解して見る事を推奬したいとも考へます。却說、又、之を國語學上の研究態度から見ても、多少注意すべき事があるかと思はれます。まだ、其の方の研究が出來て居りませぬから、申上げることが出來ないのでありますが、日蓮上人は、御承知の如く、安房の生で、あゝ云ふ氣質の人でありましたから、叡山を下つて一宗を開くや、從來の諸宗高僧を悉く罵倒し排斥するといふ勢を以つて、弟子共に與へた書、信徒に與へた書、或は述懷の書、或は時の將軍家に奉つた書などは、一氣呵成に書きなし、洗練修辭などの末技には意を勞しなかつたので、文章として、文法家の目から見れば、疵のあるのは勿論ですけれども、あの中に、躊躇なく自分の國訛りを筆にしてる所が多くありますのは、眞に貴重な所であります。文學の僞善家が、中古文の血のまはりの惡い病語

を有難がつて、幼稚なる事を書いてる間に、彼はあの時分の俗語を憚なく使用して、雄大なる文章を形作つたのです。これは、文學史上のみならず、これによつて關東方面に行はれた言語は、どう云ふものであつたかを覗ふ爲に、今日、言語の歴史を研究する人の、大に重んずべき所であらうと思ひます。これは私の氣付を申上げたまでゝ、まだ其等の研究は致して見ませぬのですから、詳しいことは申述べられませぬ。

次に、眞宗には、斯樣な平民的の宗派でありますから、其の開祖親鸞上人の、色々、愚夫愚婦を導かうとされた和讃などがあります。是は固より、文學として見ることは出來ませぬが、形は一般に七五調に綴つて、一文句は、五のものもあり、六のものもありますが、それは音の伸縮に依つて、七五の調と爲るのであります。教訓的に、如來の相好、樂土の莊嚴などを想像に浮ばせ、著しく想像の範圍を、時間的に亦空間的に、延長させる傾のあるのは、想像の形式といふ方から、文學史上、注意すべき勢力と認めねばなりませぬ。其の作としては、正信偈和讃などが、精粹であります。少しく後れて、南北朝の當時、淨土宗の

正信偈

五代目に、向阿上人といふ方がありました。其の著に、歸命本願鈔、西要鈔、父子相迎の三假名文があります。宗内では、之を括つて、三部假名鈔と申して居ります。歸命本願鈔と西要鈔とは、敘述の躰を、全く大鏡などに等しくして、或る老僧と若修行者との間の問答を、眞如堂に通夜しながら聞いたといふ仕組で、淨土宗の教義をのべたもの。父子相迎は、稀代の比喩文を以つて、吾人凡夫の境界を道破したものであります。何れも思想と意思との爲にするのではありますが、文章は、品のよき中古脉をたどりつゝ、然も、當代一流の病弊に陷つた所が毫も見えず、語格整頓し、修辭としては、恐らく、鴨長明、吉田兼好を凌ぐと云ふも、溢美ではありませぬ。唯、文學趣味の爲に貢献したものでないのが惜しいのですが、此の時代には、得易からぬ著作であります。日蓮の豪放と、向阿の溫健とは、佛教散文家の、双美と申しても、苦しうありませぬ。茲に、佛教散文學と申せば、誰でも、まづ、念頭に浮ばしむるものが、此の時代に二つあります。從來の文學史にも、已にこの注意をして居ります所の、鎌倉時代に於ける鴨長明の方丈記、室町時代に於ける兼好法師のつれ〴〵草であります。まだ時

間が少しありますから、今申した所の方丈記、つれ〴〵草に就いて、私の考を附け加へて置きます。

鴨長明

私の考では、鴨長明は、あの時代に新に勃興した佛教の、眞の精神を汲み取つた人間ではなかつたと思ひます。依然として、平安朝佛教の嗅骸を脱せず、文化史上一段の進歩と見るべき、鎌倉時代の精神を、理解して居なかつたとしか見えませぬ。彼は此の世の中を厭うて、大原山に起き臥しをしたのでありますが、其の遁世は、佛教の眞義に合するものではありませぬ。一躰、遁世といふ事をば、普通の人々は、佛教の惡德の如くに考へて居りますが、それは少しく誤の見解で、實は、佛教の偏頗なる解釋の產物に外なりませぬ。精しく說明しやうとすれば、また、佛教全般の、實行的方面を述べ立てゝ來なければなりませぬのですが、極簡略に、要をつまんで云つて見れば、佛教中の小乘教は、教理の上では、宇宙の現象的說明に終り、實行の上では、其の迷の現象界を解脫する方法を、自己一身の上に講じ、一心不亂に難行苦行をして、心の煩惱を打ち斷たうとつとめる、極めて頑固なる箇人主義、わるく云へば利己主義のも

小乘教の意義

ので、更に翻つて他を救濟するの方法にまでは、及ぶことが出來ないで居るのであります。故に、佛教家仲間では、普通、自分ばかりよいものにならうとする人間を罵つて、聲聞根性など申しますのも、此の意味から來て居るのです。

―聲聞とは、小乘的解脫を成す資格のある衆生を云ふのであります。―然るに、眞の大乘教は、教理の上では、宇宙の本躰、眞如實相の、現象界に於ける作用を講究し、實行の上では、自分を精神的に、實相即ち佛に同化しやうと勉めつゝ、更に翻つては、この苦界の一切衆生に對して、實相の佛の作用、即ち、大慈悲を實現しやうと勉むる、此の二つの任務を有して居り、然も後者の、大慈悲實現、即ち、一切の衆生を化益する事は、大乘教の小乘教と區別せらるべき最も著しい差異點であります。

偖、茲に、わが國佛教の狀態に押當てゝ視つて見ますと、俱舍、成實は、小乘教にして、教理の研究が一部に行はれていたゝけ、三論、法相も、重に教理の研究に止つて、實行的方面では、行基等の一二輩を除いては、布教に着手したものは見えませぬ。後には、華嚴、律等と共に、事相教の感化をうけて、國家太平萬民安

大乘教の意義

平安佛教

樂や、寶祚長久疾病平愈などの祈願を爲して、佛菩薩の作用を、現世利益の方に實現させる道を採つたのであります。平安朝に這入つて、眞言宗ありて以來は、此の風殊に甚しく、殆ど其の極端まで進み、叡山の天台をも傾けて、一名祈禱佛敎時代と云はれるまでに、全國を靡けたのであります。これは、深遠な敎理が、却つて淺薄な形を採つたもので、此より向內的の精神修養が怠られて、向外的の佛陀の慈光だけが蔽ぜられる事となり、弊竇相つゐて起り、佛敎の眞性を傷けた事が、少々でありませぬでした。實に、大乘極致の一墮落と云ふべきであります。既に、佛敎の傾向が、此の極端に走つたからは、此の次には、是非其の反動が起つて來なければならない勢になつて居ります。其の反動として起つた所のものは、一種の厭世主義、小乘的箇人主義であります。けれども、此等の思想は、既に、唯識の理論や、密敎の敎理やを味へた上の事でありますから、原始的の小乘敎の如くに、單純な事が出來ませぬで、思想中には、隨分雜多の異分子をも含んで居ります。又、本邦人の特性として、極端なる悲觀を起し、猛烈なる透觀を人生に與へるなどの事に得意でない所から、茲

厭世思想

隱遁と小乘敎

に、樂天的厭世思想とても云ふべき、曖昧なものが出來たので、其が形にあらはれたるものは、即ち、隱遁者の生活法であります。これは、複雜な社會の交際を蔑視し、之に交ることが、自己の道心を妨げ、解脫を得る障をなすものとして、國家を捨て、君上を捨て、朋友をすて、妻子僮僕を顧みずして、自己一身の爲に、世外に出づるもので、此の點は、全く、小乘家の態度と變りがありませぬ。然るに、此等の隱遁者が、世外に處しての生活法如何と見ると、これはまた、眞の小乘修行者にはあるまじき所行をなして、光風霽月に肅き、和歌を詠み、詩を吟じ、琵琶を彈じ、箏を奏でて心を樂まして居るといふ有樣――もつとも、人によりては、一概には申されませぬが――所詮、人工的の世を離れて、自然界の美を味はうとするもので、心の底には、やはり、此の世を愛して、優遊の天地を樂むといふ執着心を脫しては居りませぬ。唯、社會に負はされてる責任をのがれて、呑氣に好きなまゝをして、世を送らうとするもので、此の一部は、或は、支那の淸談の風などの、惡感染かも知れませぬ。此は、小乘家の罪とする所たるのみならず、大乘家もまた、以つて罪とすべき筈の行爲であります。大乘佛敎

隱遁と大乘教

は、その方法は兎に角にして、佛慈悲の實現を社會に供給しやうとして居ります。出家はその宣教師として、献身其の慈悲を衆生の上に布くべき責任を有して居ります。然るに彼等隱遁者は、自己の勝手の爲に競爭場裡に營々苦悶する民衆を捨てゝ、同情を寄せる事を知りませぬのみならず、時には、種々の口吻を以つてその憐むべきものを嘲り罵り以つて自分の心を慰藉して居ります。これは、どう見ても、佛教の罪人と云ふ外には爲方があるまいと思ひます。然も、これが佛教者だと世間から言はれては、星亨を刺殺した伊庭某が、武士道の標本と言はれるのに似つかはしからうと思ひます。言を飾つて申せば、獅子心中の虫とでも云ひませうか。西行、長明は、此の列を洩れる事が出來ませぬ。平安朝の中頃からは、此の類の隱遁者が澤山にありました。

法然房の態度

現世教の弊を矯めて、此の誤解に陷らず、此の態度を引きもどして、活動的の事相と調和させたものは、法然房源空の淨土宗であります。前の時間の日本佛教史の御話には、申さなかつたかも知れませぬが、歴史的には、隱遁思想は、現世教と淨土宗との間に生れ、性質としては、淨土教が、現世教と遁世教との中間に位せるものと見るのが適當でありませう。淨土教は、決して現世を輕んじませぬが、現世の爲に、未來の安心をゆるかせにするを戒め、未來の安心決定すれば、翻つて現世の活動に自由の勇氣を得來ると教へ、社會道德に無責任なれとは決して申しませぬ。但し、其の亞流に至つては、種々の思想を交へて、怪しいものとはなりましたが。

方丈記

思はず横道に這入りましたが、長明は、一種の淨土思想をも有しては居りましたが、これは、奈良朝の末からあらはれて居た所の、觀念の念佛門、よく申す自力の極樂參りであります。眞の淨土教の、口稱他力の平民的極樂參りでは無かつた樣に見えます。此の方丈記を書いた時は、丁度、源空上人の入滅頃でありましたから、隱捿に半生を送つて居た彼の、其の法義を知る事の出來なかつたのは無理もない事と思ひます。されば、方丈記は、主義教義としては、樂天的厭世觀を以つて事を敘したるもので、淺薄憐むべきものではありますが、唯、その作者長明が、現世に愛着して、その愛着心から事を敘したのが、それが、一般人の趣味と同樣なので、其の點が、此の書の文學的生命となり、從つ

徒然草

てこれを文學史中に位置せしめ創作物の少い當時に珍重されたものであります。決して思想として高遠なるものでも無ければ人生觀として超脱したものでもなんでも無いのです。日の無い史家の評言に盲從するなどは諸君の爲に取らない所であります。

徒然草の著者兼好法師も、また一派の賞贊者が買ひかぶつてる樣な有難い人間では無かつたらうかと思ひます。既に、かれをけなす側の人は、彼は、師直に賴まれて艶書を書いたとか云ふことを罵つて居りますが其は事實であるかどうかの考證は別と致して、唯其のつれ〴〵草は、一種の主觀的の文章でありますから其の內容の上から兼好を窺つて見ると、全く佛敎の眞精神を味つたものでない、亦、老莊の眞精神を味つたものでもない、從つて、其の安心立命の地位に自分を据へたのではない、唯、自分の知識の上から、一種の理想として、老莊の道、又、佛敎の人世觀、世界觀を知つて居たのであつて、自分が其をもつとも尊ぶと感服し、心の底から感動して、老莊であれ、佛敎であれ、儒敎であれ、其を崇拜し、信仰したものでなかつたことは確であります。言はば、自分の地金が別にあつて、其の上に儒老佛の附燒刃をして、人を脅かしたものと言つても宜しいのでせう。つれ〴〵草の全般を見るに、隨分雜駁な書き物であると云ふのは、全く其の結果に外ならぬことゝ私は存じます。尙、此の事に付いて、纏まつた意見を發表したいのですけれども、もう時間が過ぎて居りますから、是は是だけにして措きます。少し休憩を致します。

オペラ

（十）

唯今は謠曲の御話を致します。其の、謠曲の御話を致しますに就いて、少し一般の御話を申して置く必要があらうかと思ひまして、まづ、西洋の樂劇の御話をして見やうと思ひます。樂劇と云ふのは、芝居を音樂でやることであります。西洋では、之を「オペラ」と申して居ります。これは、もと、伊太利に起つたもので、始は、唯、音樂に合して、踊りを踊つたものに過ぎないらしいのですが、それが段々に進步して、其の音樂に伴ふ歌詞が出來、又、他に、美術的分子が這入つて來て、其の踊りを踊る所の舞臺を種々に美しく拵へる、其の後、唯一篇

の抒情歌では面白くないからと云ふので、何等かの事件をのべ、性格を出して來る所の、劇的のものに發達して、其の對話、その情緒を、節面白き音樂にて歌ふといふ事になつて、茲に歌劇といふものとなつたのであります。これを、日本のに當てゝ見たならば、抒情歌の踊りは、昔の白拍子が今樣を歌つた男舞とか、今日の唄に合せる踊とかの樣なもので、それが劇的に發達したのは、能樂の神事ものゝ樣なもので、役者が地顏ではなく、種々と作中の性格に裝うて演ずる事となつたと仝じことであります。此の頃、上野の奏樂堂で試みた「オルフォイス」も、神話の筋を仕組んだ「オペラ」であります。此の「オペラ」が、更に進んで、音樂に伴ひつゝ、抒情的の性質からだん〳〵に寫實的の傾向を帶びて來て、普通の複雜な事件をも仕組んで、所作に演じ得る事に發達し、世話物までも出來る樣になつたのであります。もつとも、これは、文學的に見た說明でありますが、音樂なり、美術なり(狹義の)、所作なりの進步發達も、此の間に著しく面目をあらためた事は云ふまでもありませぬ。その大詩人大音樂者として有名なのは、あの獨乙の「ワグネル」であります。―或人はオペラを歌劇と譯して居りますが、私は之を廣い意味に採つて、樂劇と申す方が穩當で、且つわが國の事がらにも當てはまる事と存じます。―わが國今日の芝居でも、書割と云ふものがあつて、演技者の場所を寫す爲に、後に岩をかくとか、木をかくとか、波をつけるとか、或は東照宮の樣子を見せるとか、櫻の盛りを飾るとかを致しますし、又、床やチョボで、三味線淨瑠璃の音樂を入れたり致しますが、「オペラ」の音樂を用ゐ、光線彩色を利用して、舞臺面を裝飾し變化させることは、決して歌舞伎どこの比ではありませぬ。西洋の立派な樂劇場には、當國に於けるあらゆる技術の、最も發達したるものを綜合して、渾然一箇の大美術品となして居るので、樂劇場にはいつてそれを觀察すれば、明に其の國の、あらゆる美術の進步程度が知れると言ふ位であります。

西洋の樂劇は、斯樣な性質のものでありますが、偖、我が國に、斯樣なものがあるかどうかと申しますと、遺憾ながら、今申した如き理想的な完全なものがありませぬが、それと多少性質を仝じうするもの、幼稚な音樂劇と見るべきものが、一般文學の衰頽した時代と云はれた、室町時代に起つたのであります

猿樂

す。一時代から云へば、西洋に「オペラ」のまだ起らない頃てありますから、珍重すべきてはありますが、その後の發達の遲々たるのが惜しい事です。—それのもとの名を猿樂と云ひ、後には主として能樂と云ふ言葉を用ゐました。或は略して、唯、能とだけも申します。此の要素として、まづ、樂器は誠に簡單なもので、大鼓、小鼓、太鼓、笛、是だけてあります。それから、其の肉音は、今日少數の人を除いては、餘り面白く味はれない、國民一般の同情を價することの出來ない譜節てあります。又、美術としては、殆ど裝飾を有つて居ない、と申してもよいぐらい、今日の舞臺では、觀世でも寶生でも、向つて左の橋掛に欄干があり、それに添うて一の松、二の松、三の松と、三本の小松が立てゝあります。其の盡きた所が鏡の間て、入口の境としては揚幕があります。次に肝要な舞臺正面には、春日の松をかたどつたとの緣起ある、大きい松の繪が一つ書いてあるだけて、外には何等の飾がなく、これとても殆ど美術として取るべき程のものではありませぬ。まして、室町時代當時に於いては、もつと〳〵單純な、殺風景なものてあつたに違ありませぬ。唯、その詞章たる文學だけは、是等のもの

猿樂能の起原

樂器

聲樂

聲明

に比較しては、餘程整頓した立派なるものを持つて居たと云つて、差支あるまいと思ひます。極めて少數てはありますが。

今、此の猿樂能の根源を少し御話して見ませう。是も、前に申しました佛敎と餘程關係があります。夫は、何よりもまづ、猿樂能の起りが、興福寺春日神社等の、佛敎的勢力の間からあらはれたのを見てもわかることてありますが、尙、其の要素の、一々について見ますに、第一、音樂的方面の樂器は、今から見れば、眞に簡單なものてはあるが、これも從前の散樂の使用して居たものゝ外に、春日などの神事に同列して、興福寺の支配を受けて居た田樂や細男と、同じ笛、太鼓、大鼓、小鼓を採用し、鎌倉以後は、重に佛敎の勢力範圍內に、支配されて居たものらしいので、全くその臭味無しとは言はれますまい。次には、聲樂て、佛敎の方では、經文を唱して佛を讃嘆し、或は義理を講ずる以前の素讀にも、一種の節をつけて謠ひます。又、佛敎の敎義を問答する場合には、今て申す討論會樣のものを行ひますが、其の時にも、問答の儀式に節を付けて讀み、或は語ることがあるのです。それを廣くとつて聲明と云ひます。—之は、印度に五

明と云つて、五つの藝術があります、其の一つで、甘く聲を使ふ學問と云ふ意味てありませう。「今の耶蘇教で、讃美歌を謠ふ樣なものてありませうか、斯う云ふ場合に謠ふ、この聲明の節其の物を用ゐて、猿樂の樂譜としたのてあります。今ても奈良に參つて見ますと、法相宗などの寺院は、昔の聲明を受け繼いて、色々の儀式に諷誦して居りますが、其の節に、ハルとか、クルとか、サシ聲とか云ふものが規定してあり、また、前に云つた討論會を、彼の道て論議と申して居ります。今日、實生ても觀世でも、謠ふ節に付いて聞いて見ますと、皆、此の名目が存して居りまして、此處はロンギてあるから輕く謠はなければならないとか、之はクル節の中てもカングリだから、一調子高く持つて往かなければならないなど云ふ說明がありますが、此の學術語は、全く、佛教の聲明から來て居るのてあります。その上、當春、大和に旅行致しまして、俗に安倍の文殊と云ふ、日本三文殊の一とか申してる、崇教寺を訪ひました時分に、文殊講式の一卷を見ました。所が、其の節付は、全く謠本と全じ符號て、唯その煩簡の別があるだけに過ぎませぬでしたのは、いよ〳〵私の說を有力にするものと思はれて、非常に喜んだ事てした。是等を以つて見ても、佛教の方から影響を蒙つてる。寧ろ、奈良の諸講式の音譜を綜合して、美術的となし、之を猿樂の節としたものと見る事が出來やうと思ひます。今日の文學史家中ては、殆ど定說になつて居るらしいのてすが、平家物語は、琵琶に合して謠ふものてあつて、その節は聲明から來て居る、さうしてそれに、引句と語句とがあつて、普通に節なしに語るのが語句、引張つて節を付けるのが引句と申し、それを直に謠曲の音樂に用ゐたので、能樂の文章なり筋なりが、平家物語に在ると同時に、音樂としても親子の關係があると、斯う申してる樣に見うけますが、私は甚だそれを疑ふのてす。私は、まだ、折が無くして、平家物語を琵琶に合した、純粹のものを聞きませぬが、それの轉訛したものを聞いて見ますと、成る程、猿樂謠曲の仕組の樣に、語句引句らしいものはありますけれども、それと謠曲の樂節とは、どの位近いものてあるかは怪しいものてあります。それよりも、實際に、奈良佛教の聲明を聞いて見ますと、私どもの素人耳にも、どうしてもこれが謠曲の節の、尙幼稚なものとは合點が參りますて、私は、寧ろ、謠

曲の音譜は、佛敎の儀式から取つて、其の宗敎的のものを美術的趣味的のものと改進さしたので、諸學者の說程に、平家琵琶に重要な關係あるものでは無いと信じて居ります。之は、十分、諸君の御研究を煩したく存じます。然も、薩摩琵琶や、肥後琵琶など云ふものは、謠ふ聲と琵琶との關係が、全く幼稚なもので、謠つてはひき、謠つては彈きするので、彈くと謠ふと伴つた所の趣味が少しもありませず、彈きながら歌ふのは、單に拍子を取るだけで、何等調和の趣味が生じませぬ。今日でもまだこんなものが喜ばれて、音樂會などの仲間入りをして居りますが、其の源流たる當代の平家琵琶は、果してどんなものであつたか、推して知るに難くはありますまい。其の平家が、直に、笛、太鼓、大鼓、小鼓の複雜なる變化の親たるべしとは、鳶が鷹の子を生んだ例にも無い圖かと思はれます。

さて、其の所作舞は、朝廷の御儀式に用ゐられて居た雅樂の舞に、寫實的の所作が結合したものであるかと私は思つて居ります。例へば、青海波とか、蘭陵王とか、納曾利とかいふ名目の舞樂がありまして、時としては、色々の伎樂面を蒙り、手に矛を持つたり、鞭をもつたりし、長く尻を引いた衣服を着て、優々と舞ふ。それをならつて所作と此の舞ぶりとを調和よくしたものではないかと思ひます。げれども、これとても、佛敎と關係なしとは申されませぬ。即ち、何等かの大法要を營む時には、必ず、舞臺を設けて之を奏するのが、昔からの例で、四天王寺、法隆寺などの大寺院には、其の爲に、特に、世業の雅樂師が附屬して居たものであります。これは、日本の歌舞音樂史上に、注意すべき事項であらうと思ひますが、夫は兎に角にして、猿樂の完成は、主に此の邊から模範を得たと見るのが至當かと存じ

結語源

さて次には、猿樂能の筋なり仕組なりが、如何にして出來たものかと申すと、猿樂はもと、語源は散樂でありまして、支那の言葉であります。正式の雅樂に對する、雜なる樂と云ふぐらゐの意味で、滑稽なこともすれば、或は、規則正しくないざればみた、卑近な事もする性質の樂でありますが、その支那音が、後に日本的に發音されて、「散」の「ン」が「ル」となり、サンガクがサルガクと呼ばれる事になつたので、丁度、駿河をスルガと呼んでるに同じ事であります。して、い

つの頃からか、日本流にサルガク、サルガクと呼びならされゝば、散の字が表音に穩當でないと云ふので、猿と云ふ字を當てることになつたのです。太古には、神話や傳說が、言語の轉訛や誤解から生ずることがあるものですが、我が國には此の時代になつても、此の徑路をたどりまして、この猿といふ文字に依つて、色々具象的の理由を求め、さもありさうな傳說を作りあげました。例へば、猿はひとの眞似をするもの、然るに能樂は、人間や神樣や幽靈などの眞似をするものであるからと云ふので、猿の字を當てたとか、或は猿女の命が、天の岩戸の前で舞を舞つたのが、これの起原であるから、その頭字を取つたのであるとか、或は、又、サルと云ふ字を申の字に書き換へて、昔聖德太子が、神樂を崩して卑近なる一の面白い曲を御拵へ遊ばした、所で、さ樣な卑近な性質のものに、神と云ふ字を當てるのは勿躰ない所から、神の字を二つに別け、篇を取り去つて作りだけにし、申樂と書くことに定められ、後には猿樂とも書くのだなど云ふ、あられもない傳說迄傳へて居るのでありますが、是等の傳說は皆誤で、もとは散樂の音轉たる事は疑ありませぬ。そこで、此の散樂

の昔の有樣はと申すと、之は最も簡單なもので、今日の手品師の樣な藝をしたり、或は仁和加狂言見たやうな滑稽なことをするに過ぎなかつたらしいのでありますが、それが段々に年が經て來るに從つて、其の實が進步して來たものと見へるのでありますそこへ他の種類の發達した文學なり筋立なりが加はつて來たので、それが爲に俄然として、一の立派な文藝として見るべき猿樂が成立する事となりました。他の種類のものはと申しますと、まづ、平安朝の時代から、田樂と云ふものがありました。これは、百姓が、耕田の勞苦を慰めやうとして、滑稽な樣子をしたり、笛太鼓を鳴らして踊り廻つたりなどするより始まつて、後には猿樂の樣な手品師じみた業をも、合せて演じたものでありましたが、それが段々進步して來て、田樂の催の時に、その中に、眞摯な趣味のものを行ふ事が始つて、小野小町と云ふ題目で、其の美しい姿を演ずるとか、法然上人と云ふ宗敎界の大偉人を題にするとか云ふ事が始まりました。これを田樂の能と申します。田樂のもとが囃し踊りを本趣意とし、離れ藝を餘興としたものでしたのが、鎌倉の末になつて、能と云ふ一の所作

幸若

文學

をするまでに發達した事が、筋立の上に於いて、猿樂能の前例を示してるものと見なければなりませぬ。外に、延年舞の事を說く人も有りますが、今では、殆ど、實際を徵する事が出來ませぬ。又一方に、叡山の稚兒に、桃井幸若丸といふがあつて、それが音節に巧で、一種の舞を始め、幸若と稱へて、室町から德川時代まで、上流者の間にもてはやされたものでありました。今其の文を讀んで見ると、一種の散文ではあるが、題目は、餘程、謠曲と同じものがあります。けれども、文學として、兩者に直接の關係があるかどうかは、暫く疑問であります。又、舞として、猿樂の起原に關係あるかも知れませぬが、私の今までの研究では、憶測以外に、何等の考證をも與へ得るには至つて居りませぬ。唯、この文躰が、文學として、淨瑠璃文の組織に關係あることは、觀過すべからざる重要な事と、これだけは深く信じて居ります。

更に轉じて、平安朝の中頃以前を見るに、普通娛樂に供へられたるものとして、催馬樂と云ふものがあり、之を樂器に合せて歌ふことでありましたが、其の內容は、誠に簡單で、文化の次第に進んで來た人間には、いつしか喜ばれな

今樣

和讃

い樣になつて、其の代りとして、新しい歌曲が出來ました。それを今樣と云ふのです。當世風の流行歌と云ふ意味であります。併し、始の內の今樣とは、主に、節が新流行といふことでして、文句は後の七五四句の今樣とは違つて居ることを注意しなければなりませぬ。源氏物語、或はあの時代のものに見へて居る今樣と云ふのは、一句中の文字の數が定つて居ないもので、或は六つの言葉もあり、七つの言葉もあるやうなわけで、催馬樂の少し複雜になつたぐらゐのものであつたが、平安朝の後期になつて、七五四句の今樣となる事件が起りました。其は、前時代から、和讃と云ふものが、佛敎信仰者の間に行はれて居りまして、一印度のを梵讃と云ひ、支那のを漢讃と云ふに對して、我が國の讃をば和讃と唱へたのです。—それは、修辭上の拘束の極めて弛やかな七五調で、佛語も漢語も憚りなく挿入される、口調よきものでありましたから、それが段々勢力を得て來、從つて流行の今樣も、それに引付けられて、漢佛語の這入つた七五調のものになり、從來の催馬樂系の發達したものと生存競爭をなした結果、和讃風の今樣が優勝で、其の後、今樣と云へば、七五四句に限るも

宴曲　曲舞

のゝやうになりました。それがまた、諷謠として、讀む歌以外にも、文學者から顧みられ、一時は、今樣合などの催も行はれた程でありました。慈鎭和尚の、四季の今樣も、此の方の名ある作であります。然るに、鎌倉時代の初、尚その以前から、今で申しますと藝者ですが、白拍子と云ふものが弄ばれまして、其の白拍子が、坐興の爲に今樣歌を唄つて、舞を舞ふことでありました所から、その面白さにつれて、今樣歌も盛に行はれて來まして、鎌倉時代の末には、其が一種の宴曲と云ふものになりました。之は、今樣の形の、更に大きくなつたもので、大躰は七五調ではありますが、尚、七八の句が這入つたり、四言六言のがあつたりし、又十句廿句の大きい形になつて居ります。そして、之に、春とか、海道下りとか、或は海邊とか云ふ題を設けて、それを宴會などの席で拍手を取つて唄ふことでありました。之に合せて、扇子を取つて舞ふのが曲舞であります。此の宴曲の、更に文學的に膨脹して發達した所のものは、即ち謠曲の文章であります。げれども、謠曲の文を以つて、直に宴曲の膨脹したものとするのは誤であります。謠曲の文は、これ以外の性質をも帶びて居りまして、優秀なも、のは、新古今風の技術を散文の上に應用して居り、拙劣なものは、御伽草紙と同樣なる弊實に陷つて居ります。中には、平家物語その外の古文學の文を、そのまゝに仕組んだものもあり、且つ、餘程發達したものでは、戲曲的の文躰に組立てゝあるので、一に宴曲文を以つて、其の父と見る事は出來ませぬが、最初期の謠曲は、之に緣をもつてる事は疑ありませぬ。

茲に注意すべきは、宴曲の文章が、一篇の抒情、もしくは敘景的のもの、平家物語や伊勢物語は、低き意味で云ふ敘事的のものであるのに、其等を前驅とした謠曲文學の、俄然戲曲的組織を備へるに至つたのは、何故であるかとの事であります。田樂には、既に、能藝の生じて、ある性格に粉したる演者の、小野小町、法然上人、北野物狂などをまねぶことはありましたが、序の獨語から、次に事件の開展となり、山となり、破綻となり、層々して大團圓に至ると云ふ樣な筋立は、未だ完全し無かつたらうと推せられるので、必ず、之に、此の結構を敎へ、模範を示した所の、何物かゝなければならないと思ふのです。それは外でもない、前に漢文學の狀態を述べた時に申しておきました、元の雜劇であり

ます。これが、如何にしてわが國に這入つたかと申しますと、鎌倉時代、室町時代には、禪宗が大に盛で、彼の國の禪僧が這入つて來る、又我が國でも、彼の國に渡るものがあると云ふ狀態でありましたから、彼の國の面白いことは、自然、我が國にも移して見やうとするのは自然の事で、吾々の今日でも、我が國に眞正の「オペラ」がないから、多くの人々が遺憾に思つて、どうか西洋の「オペラ」を移したいと、奔走盡力してる樣なものでありませう。かくて、僧侶輩が、かの演伎を見ならつて來て、さて之をわれに移さうと企てたとすれば、如何なる方法に出づるでありませうか。元劇そのまゝを演ずるか、俳優ならぬ僧侶には出來べくもありませぬし、他のものは、また、元劇そのものを知らない。されば、從來わが國に行はれて居る、所作舞台を土台にし、從來の樂師を役者とし、其の音樂も、役者の手なれてる所、或は緣故の近いものを加味する事とし、唯、元劇をば、性格配置の模範、戲曲的文學作の典型として、參照する事としたのは、固より其の所かと存じます。で、僧侶等が、其の土台として用ゐたのが、從來の猿樂で、自分等は、唯、單に文學作者として、詞章を作り與ふれば、猿樂師は、

夫に節づけをし、舞の振を付けて、一曲の劇とするに至つたのであります。併しながら、起原は春日興福寺あたりの勢力にあつたとしても、其の發達が、どれ程まで奈良に於いて成就し得たか、將た、如何なる狀態のが、京都に移されて、京都の地に於いてどんな發達をなすに至つたかについては、まだ殆ど明でありませぬ。世間には、隨分、此の間の事を說明してるものもありますが、一つもあてになるものは有りませぬ。それでも、是から注意をして研究したならば、だん〳〵分つて來る事かと存じます。

それについて申して見たい事は狂言であります。一般の定說では、以前の滑稽な、ざればみた猿樂が、俄然眞摯な能藝となつたので、もとの滑稽の末路は、どうなつたのかと云ふと、それは、即ち、狂言と云ふものになつたのであると、かう申して居るのです。げれども、それが如何なる歷史的關係を有し、如何なる道筋を進んで、さうなつたのかは明に說明しては居りませぬ。私の考へますのに、それはどうも怪しいのです。以前、滑稽な所作をして、猿樂の名をもつて居たものが、何の爲に狂言と云ふ名生じをして來たか、こゝが一つ考へべき

點であらうと思ひます。以前の滑稽の演じ樣と、後の狂言のやり工合とを比べて見ると、まるで滑稽の性質を異にして居る。後の狂言は、既に一種の筋を持つた芝居で、まづ、人間と人間とが出て來て、其の間の對話で事件が持上つて、それがやるまいぞ〳〵で局を結ぶと云ふ、何にまれ、一の筋を有して居るのに、以前の猿樂は、例へば、天鈿女命が、半裸躰の姿で踊りをするとか、或は、宇治拾遺物語に載つて居る如く、家綱行綱の兄弟が、火の周圍を醜躰をあらはして廻つて見せるとか、乃至は、物眞似の可笑味であつて、全く趣味にもなにもなつて居りませぬから、事件の間に起つた滑稽の趣味とは、雲泥のけじめがあつて、關係が殆どないと云つても宜くはないかと思ふ位であります。少くとも、此の間の關係が、事實に證明されない限りは、私の信ずることの出來ない所であります。私の考では、昔から今もする事でありますが、能には間の狂言といふものがありまして、能役者の外に、狂言といふ男が舞台に出て、筋の補綴や幕間のつなぎなどを致します。能の舞台には、幕と云ふべきものはありませぬから、前の段と後の段との間に、主人公が裝束を變へて再び出

て來るまでは此の狂言が塞ぎを爲す役目を持つて居ます。又は、役者と一緒に舞台に立つて、互に問答をし、役者の缺を補ひ、或は、可笑しい筋を演じたりも致します。されば、此の種類にも色々ありまして、普通、平の間とか替の間とか申すのもあり、または、語りの間、合釋の間、シャベリ、末社など云ふものもありますが、總じて其の遣り方は、謠曲の演じ樣とは餘程趣を異にし、能の方では審美的の所作をして、言葉遣ひも優美に心を用ゐて居り、聲色も中々美しく遣ひますが、狂言男は頓狂聲をして、無造作らしい、又は滑稽の趣味ある遣ひ方をします。―其の道に於いては、其處が中々骨の折れる、氣合のあるむつかしい所だと申して居ります。―此の、間の狂言が、いよ〳〵其の特色を發揮し、後に、能の組織に倣つて、獨立した仕組をこしらへた所に、後の狂言が成り立つたのであるかと思ひます。

此の狂言と云ふ語は、佛敎の方で、十戒の一つたる綺言とならべて、狂言綺語とも申し、事實でない、作り飾つた、架空的の言葉などを意味するものでありましたが、此の頃では、不眞面目、或は滑稽といふ位のこゝろに

用ゐられてた樣に見えます。

けれども更に退いて考へて見れば、間の狂言の起りそのものが、以前の猿樂の滑稽と、快活の精神を等しうするとも云ふ事が出來るかも知れませぬ。又、能藝中に、狂言男を挿入する事にしたその導きが、以前の猿樂の餘波と見る事が出來るかも知れませぬ。併し、後の狂言を說く前に、一階段をなす此の間の狂言を認めないのは、如何であらうかと思ふのです。尙、此の關係に就いては、多少材料を集めましたから、も少し秩序立つた研究をして、遠からず結果を發表しやうと思つてます。只今は、これだけの問題に觸接するに止めて置きませう。次には、猿樂の能の發達完成の順序を概說し、合せて其の性質の御話をして見たいと思ひます。

猿樂の發達

既に、元の雜劇が這入つて來て出來上つた所の猿樂は、一番始めに、どんなことを述べたものであつたかと申すと、一ちよつとそこに、御斷り申して置きますが、今、猿樂といひ、能樂と云ひ、或は樂劇と申しますのは、美術、音樂、文學、舞台面の所作全躰を總括して申す名であります。し、謠曲と云ふのは、それの文學の方面だけ。捕へて云ふのであります。もつとも、世間一般では、謠を謠ふことを謠曲をやると云ひます。即ち、音樂の一部分を捕へて謠曲と云ひますが、文學史の上で謠曲と云ふのは、唯、文學の方面を指して云ふものと、御心得置きを願ひたいのです。一最初に、謠曲の成立つた時のものは、神樣の有難い緣起を敍べ、其の實現として、奇特の舞に移る性質のものであります。勿論、其の間に、人間が御伴になつて出て來る、或は神主が相手になつて出て參りますが、其の曲の主人公は神樣で、以前には爺さんか何かの形になつて現れて來るが、翁と、神主との問答の間に、緣起としての神の威德がのべられ、終りに其の具象的證明として、前の翁が神樣になつて、神殿になりひゝく舞樂を實現する、または神主の奏樂によつて、神とあらはれ來つて舞を爲すといふ筋であります。この形が、一番始めに發達したものであらうと思ひます。何ぜかと申せば、翁を出す、神主を出す、其の間に對話を導くとなつたのは、餘程進步した點ではありますが、春日神社などの周圍に生れた物として、まづ、神佛一躰の思想から、權現明神の奇特を文藝の材料とするに至るのは、最初の着手

神德もの

と見るべきもので、且つ、筋の結局が、事件のまとまりてはなく、百川の海に朝するとでも云ふ樣に、みんな舞を舞ふことになつて仕まふのを見ると、以前の、雅樂の舞や、白拍子の舞や、曲舞やの原始狀態を脫しない性質てあります から、此等の理由によつて、此の性質が、謠曲を通じて、最初と見るのが至當てあらうと思ふのてあります。右近、松尾、龍田、放生川などは、之に屬して居ります。

祝意もの

次に、祝意をのべるものが出來たらうと思ひます。これは、其の形も、其の性質も、大に神德を敘べるものに似よつて居りますが、理想は、神の出現も天空の音樂も、凡て、君が代の萬歳を祝するにあるとする所が、少し異つて居ります。一躰、前にも度々申しましたが、我が國に密敎が這入つてから、其の事相的迷信が非常に跋扈し、從來の神は悉く本地を有する存在者てあるとして、佛敎的の奇蹟を神の上に負はしめると共に、國家の安寧、寶祚の長久、萬民の平和の爲に、其を祈禱し、亦加持力を願ふ事が、平安朝以來、室町時代に至るまて、毫も變らなかつた所の奈良佛敎の信仰てありまして、此の信仰から、前には佛敎的神格を材料にした謠曲が出來、後には其によつて祈り得べき、國土安全、五穀豐饒、君が代の萬歳を敘べ祝する謠曲が出來たのてあります。其故に、其の性質や形は、兩者著しい相違がありませぬ。高砂、弓八幡、岩船、老松などは、此の種に屬してますが、餘り面白いものはありませぬ。

以上の樣に、御話は致しましたものゝ、尙、其の後に研究して見た所ては、祝意ものが、むしろ、神德ものよりも初期の性質てあるらしく思はれます。殊に、戲曲的の形を具備せず、唯、一篇の祝言文見たやうなものが、一番古い猿樂てあつたらしいのてす。例へば、鶴亀、鷺、枕慈童などの類て、此等の文躰は、まだ、充分に戲曲的になつて居らず、たゞの敘事文を、互に謠ひ語る事にしたものに過ぎませぬ。神德ものは、此の次にあらはれたものてありませう。(校正の時に追記す)

佛力もの

次に發達したものは、佛敎の理想を皷吹して、其の威力の、種々の事件の上に實現することを筋立した謠曲てあります。これは、當時、現世的敎理と共に、未來的佛敎の考も行はれて居たので、神德と祝意との外の理想としては、敎理

の功德そのものを尊拜して居たのは明な事實で、然も、その作者が僧侶に多かつたらしいから、此をも材料とするに至つたのは、もとよりの事であります。且つ、其の實現の筋としては、之を神德もの同樣に、奇特の舞樂に托したもの、教義そのまゝを風喩的に仕組んだもの、有形的に惡魔折伏を演ぜしめるもの、無形的に修羅の妄執や、邪婬の惡鬼や、殺生の業果や、綺語の戒報や、非情の障礙や、妖怪や、愛着や、怨恨やを拂掃して、得道成佛の妙果を得しむるものなど、單純より複雜に亘つて、一律になつては居りませぬが、就中、修羅の妄執以下の事件は、多く、源氏物語、平家物語等の古文學、或は傳說に材料を取つて、理想以外に多少の趣味を持つて居りますので、私は、之を、神德祝意などの、更に文學的發達をなしたものと見るのであります。但し、此の種のものを以つて、悉く、佛敎の信仰を起させ、又、布敎の一助としたものと見るのは誤です。これらは、必ずしも、實行的の要求を有しては居りませぬ。唯、自己の理想とする所の佛の威力、もしくは經文の功德が、果して此の如き實現をなしたと云ふことを喜ぶ興味を嗜む事、それが唯一の生命であるものも甚だ多くあるのです。江口、山姥、實盛、敦盛、八島、求塚、松風、藤戸、黑塚、田村など、之には有名なものが澤山あります。

けれども、たとひ、無學で、佛敎より與へられた興味だけの世であつたにしした所が、既に趣味の形式たるべき樂劇を有する以上は、そが本來の面目を發揮すべき謠曲の創作を、促さずには居りませぬ。で、まづ、趣味に貢獻する作物が、此の次にあらはれて參りました。それは、前者の、抽象理想の鋒を隱した所の、超自然的物語であります。或は、英雄說話と呼ぶべき邊もあります。即ち、人間の自然力では出來まじき所の、然も恐ろしく面白い事がらを述べたもの。例へば大江山の鬼神退治の如き、鬼などは吾々の實世界には見えるものではありませぬが、それの恐ろしい有樣、退治の勇ましい樣子、それが文藝の材料になるのです。或は、紅葉狩で云へば、信州の戸隱山中にて、平維茂が稀代の美女に誑され、無明の酒に醉はされて、うと〳〵眠りに落ちてしまへば、時かしこしと件の女が、その本性の鬼となつて、唯一と口に喰はうとする。あれ危ういと見る此方の維茂は、夢に戸隱神の告に驚かされ、太刀拔き翳して縱橫奮

進、遂に惡鬼を退治したと云ふ、神秘的の趣味のものであります。前のものが、いづれも、抽象的理想的で、趣味の談ずべきものが無かつたのに、是に至つて一種の「ロー、マンス」を作り出したのは、始めて指導者たる元の雜劇に添うて、其の精神を解し得たものと云つてもよからうと思ひます。今申した大江山、紅葉狩の外、土蜘蛛、羅生門、羽衣などは、此の有名なものであります。

其の次に起つたものは、同じく趣味の爲の作ではありますが、前の、實在以上の事件を材料とするのに反し、これは全く、實世界に起つた過去の事柄を首尾して、一曲に纒めたものであります。例へば、曾我の復讐は、千古の美談であるから、その引きつゞきの長い物語を、あちらを取り、こちらをまとめて、母子の情の切なる所をとつては小袖曾我を作り、討入の勇ましい點を捉へては、夜討曾我を仕組むとか、或は、俊寛僧都の、一人、鬼界ヶ島に取殘される悲を筋立しては俊寛を作り、最明寺時頼の名政に關係しては、鉢木、または藤榮を成すといふ樣に、凡て、歴史上の事物を劇作するもので、今日の言葉で申すと時代物であります。以上の外、熊野、七騎落、安宅、攝待、千手、小督、景清、烏帽子折、など

時代もの

世話もの

は、その有名なるものであります。

次には、當時代の室町前後の社會に起つた出來事を材料としたもの、所謂、世話物の曲が出來ることゝなりました。これが、第六番目の發達で、樂劇の性質の、最も進んだものと思ひます。第一は、神德をたゝへて奇特の舞に終るもの。第二は、殆ど同樣の筋ながら、君が代の祝意を敘べることが著しいもの。第三は、佛力を敘べて、其の敎義に對する興味をひき起さうとするもの。これには多くの種類を含んで居て、前の第一種の性質に近いものもあれば、次の第四種第五種に推し移らうとしてるものもあつて、言はゞ、發達の過渡を示してるものであります。第四は、理想を離れて、超實的の說話に趣味を置くもの。これは、文學論の所で申しました、不明瞭な想像の結合であります。第五は、前時代の歴史的事件を捕へて、一曲に作りなしたもの。第六は、時間の薄物を被らない、自己と同時代の社會を、曲に仕組んだもので、此の世話物は、例へば、此の時分に人買が流行して、小さな子供を見れば引きさらつて行く、或は貧乏人の子供を買つて、何所かの遠國へそれを連れて往つて、自分の餌にすること

などがありまして、茲に母子の間に、哀別離苦の事件が起るのですが、其の煩悶流浪の瞬間を捉へて、曲にする樣な類であります。今、隅田川の曲の筋で申して見ますと、夫に別れて、北白河のほとりにわび住居して居た母が、思はざるにひとり子を、人商人にさそはれて、東の方へ下りぬと、聞くより心亂れつつ、そなたとばかり思ひ子の、跡を慕うて吾妻路を下り、武藏下總の境なる、隅田川まで來て見れば、向の岸の柳の下で、大念佛の執行がある。かゝる田舍にさて何事かと、或乘合の旅人が訪ねた所が、渡守の說明は、最も可憐なる幼兒の臨終物語であつた。然るに其の幼兒とは誰あらう、今此の船中までも、せめて逢はんを賴みとして、狂氣の姿に尋ね來れる女の子梅若であるではないか。然も、其の死は、去年の今月今日に當るといふ、狂女の煩悶は、更に幾層を加へたらう。斯くて村民の好意によつて、其の大念佛修行に加はり、泣きくづ折れながらも、一心に愛兒成佛の念佛を唱へた所が、不思議や己が子梅若の姿が見えた。やれ嬉しや、梅若がまだ生きてるかと、抱き付かうとすると手にもたまらず、其の影もなくなつてしまつたから、偖審かしやどうした事かと、唯

吊然と立上つて見れば、我が子の姿とは我心の偏計で、覺ればもとの淺茅原、草茫々たる塚の上に、新柳の糸無心に動いて居ると云ふ、ちよつと夢幻的の所もありますが、一般には此の時代の趣味ある題目を取つて曲に結構し、之に節付をし、舞台の上でも、餘程寫實的な所作をする事となつたのであります。櫻川、柏崎、百万、三井寺などは母子の關係、舞車、籠、太鼓は夫婦の關係、望月、放下僧は敵討に於いて、面白い曲であります。

以上は、謠曲全般の文學的發達の順序を、概畧に申したのでありますが、創作の實際も、必ず、或る點まで、之に一致して居る事と推量致します。但し、數百番の多數でありますから、其のうちには、模擬的の製作も非常に多く、從つて、第一種の性質を持つて居るものでも、第四種第五種などの作のあつたずつと後に出來た者もある事は、勿論であります。また、謠曲には、此の如き發達の順序や、性質の異る者があるから、一以つて其の概評を試みるの、甚だ危險な事をも注意して置かなければなりませぬ。尙、他に、曖昧な性質のものもありますが、大躰は以上に洩れませぬ。亦、他の特殊の標準から分類して見れば、色々

面白い事もありますが、夫は今申して居る暇がありませぬ。之が形式上の分類については、昨年の國學院雜誌に載せて置きましたから、御覽を願ひます。

（十一）

室町時代を過ぎて、もう江戸德川時代に這入りました。德川文學は、其の時代三百年に亘り、價値も多く、種類も複雜になつて居りますから、之を研究するには、色々の方法があらうと思ひます。しかし、私の本論には、到底全般を盡すことが出來ませぬから、僅に之が概評を試みることゝし、まづ、時代の區別について申して見ませう。

德川文學の四期

德川時代三百年間を、四つの時代に別けて見ることが出來やうかと思ひます。即、第一は啓蒙時代、第二は發展時代、第三が沈滯時代、第四が隆盛時代と、此の四つに別けたいと思ふのです。先づ、第一の啓蒙時代から說明して參ります。

啓蒙時代

室町時代の事を申しました時分に、其の時代は、無學の極に陷つて、國民の思想を支配して居た所の重なるものが、迷信多き佛敎であつたことを申しました。

世間學

したが、其の引續が、德川時代の初めの時代をも占領して居たので、國民の心は、宗敎の迷信に蔽はれ、社會の勢力は、無學なる武人にあつたのであります。から、德川氏が幕府を開いて、段々に文敎を興して來る手續としては、まづ何よりも、今迄の幼稚なる迷信多き時代から、次第々々に國民を醒覺して往かなければならない機運に向いて居るのであります。又、一方の宗敎家の側から云へば、從來のやうな、物の分らないことではならないから、次第に學問的に佛敎の方に導いて往きたいと云ふ事になり、茲に、兩方進んで、人民の知識を啓いて往くことになつて來たのであります。其の時代が即ち啓蒙時代であるのです。その啓蒙的の運動としては、まづ、世間學の方で申せば、德川氏が幕府を開いてから、前時代に無學の境に彷徨して居た事が、天下の戰亂をして、筋なきものとなさした原因であると悟つて、專ら僧侶、或は、學者を招いて文敎を興すことに力を致し、幕府の內に學術の府を置き、學問の研究を進め古書を探し、種々の出版をするやうな手段に出で、其の政治向に相談相手とするものも、僧侶の學問ある者、即ち金地院傳長老であるとか、東叡山の天海

出世間學

僧正であるとか、或は三代將軍になつては、澤庵和尚であるとか、僧侶で打拔きの人間を採用し、從つて大に學問興隆に力がありました。是より、支那の經書は勿論、文學書類も、多く、訓點や、傍訓を施されて、世にあらはれ、わが國の古文學書の寫本をも、版行することゝなつたので、今までは堂上人にのみ手にせられて、しば〳〵邪道に陷つて居た學問文學が、今や門戸をひらいて、地下の多衆にも接することゝなつて、篤志の士は、相擧つて、此の寶の山を探つて見やうとするに至り、段々にその註釋物も出來るに至り、また、それを俗解して柔かに書き碎いたものも出來、それから、又、支那の面白い文學を讀むことが一般には出來ないから、其を假名交りに飜譯して、世間の人に讀ませる事も、先覺者の任務としてつとめられたのであります。中に珍らしいのは、既に此の時代に、今日でも中學校などで讀まれる「イソップ」物語、あれなどを日本の文に飜譯をして、伊曾保物語と云ふ名目を以て、隨分奇態な繪を內に加へて、刊行して居るとであります。斯樣にして、次第に人々の知識が啓けて來たのであります。次に出世間の佛敎家の方では、これも、一には文字說敎の考があつたかどうか、兎に角此の時代に取つては、學術の先覺に相違ないから、自己の佛敎の敎理、或は雜書中の傳說などの面白い事を、假名文に仕立てて、人心を啓發しやう、敎義を知らしてやらうとして、其の方の著書も段々出て來る事となつたのであります。此等の事業努力は、確に無學なる社會を誘導啓發して、次の時代を形造くるべき要素を、充分に此の時代に仕込んだものと云ふべきであります。一般社會の上から云へば、此の間は、實に、修養の時代でありました。學者としては、惺窩、羅山、及び其の門下輩は云ふまでもありませぬが、作者としては、鈴木正三、或は、如儡子、山岡元憐、それから有名なは淺井了意であります。第一の啓蒙時代は、まづこんなものでありました。

發展時代

第二の發展時代―隆盛の時代ではありますが、先の啓蒙の語に相對し、下の隆盛時代に區別して、暫く斯く呼びます。―は、年代で申せば、元祿時代と云ふに當ります。以前の啓蒙時代は寬文以前の時代を申すので、慶長、元和から寬永、慶安、万治、其の後の寬文あたりまでを總括してるのです。次きの發展時代は元祿時代であります。これは、元祿を中心として、上は天和貞享に遡り、下は

享保元文から、寶暦以前位までを含まして居ります。此の時代は、德川氏が幕府を開いてより、殆ど百年の後になりますが、凡そ、社會に、一大騷亂が起つて、文藝上に、大打擊を與へますれば、それが、平和に歸してからは、だん〳〵、其の傷を愈して、健康躰に復さうとする傾を生じ、其の時期が、大抵百年を過ぎると、今度は、新らしい機運を迎へて、全く、面目を改めた所の、文學の勃興を招くに至るは、洋の東西、時の古今に通ずる、約束の如くに、認められるのであります。して、元祿時代は、恰も、德川氏が、幕府を開いて、室町戰國の傷痍治に着手してから、百年の後に當ります。彼の、平安朝時代も、初め、奈良朝から、引續いて、支那の文化を入れて居た間は、まだ、平安朝時代國文學の特色が、顯はれなかつたのですが、それが、遣唐使が止んで、外國の刺激が、起らぬ、社會を攪亂する、勢力が無くなつて、その後百年にして、稀代の名作源氏物語が、出來、また、余の價値ある文學も、續々として、著はれて來たのでありました。さう云ふ次第でありますから、今日でも、明治維新後、まだ、三十有餘年にしかならず、嘉永の六年に、提督ペルリが、浦賀を見舞つてから、丁度五十年になつたばかりで、御約束の

百年には、尙、中々、年月を要する、事であります。從つて、今日の世の中に、直に、大文學を望むと云ふことは、從來の經驗からしても、無理なことではあるまいかと、思ひます。昨今の世は、盛んに、新しい外國趣味を、我が國に、輸入して、消化機能を、旺盛にして、食傷しない樣に、同化作用を營むべきの時、言ひかへれば、尙、啓蒙修養の、時代であります。かくて、もう、五十年も、經つたならば、待たずして、明治の、聖代の、秀逸なる、文學は、勃興し來るであらうと、思ひます。氣を長して、私等は、待つて居ります。但し、目下に、吾々の、趣味心を養ふものを、要求するに、及ばぬとの、意と、誤解してはなりませぬ。兎に角、元祿時代は、さう云ふ風潮に、從つて、茲に、一大發展期を、劃したのでありました。此の時代に、發展の、動機となつたものは、云ふ迄もなく、第一の、啓蒙時代に、於いて、色々、試みこれた、其の、勞力に、外なりませぬ。其の、修養が、積んで、茲に、此の、結果を、現したのであります。さて、此の、時代に、どんな、文學が、現れたかと、云ふと、啓蒙時代には、女子供でも、喜ばせる樣な、其の、內容なり、文章なりの、極めて、無造作なる、假名草子一類に、止つたのでありましたが、元祿時代になりまして、廿年來、吾々の、文壇に、明

治の新小說として勢力を持つた廣義の寫實小說に暗示を與へ、文例を示した所の小說を出したのであります。それは何であるかと云ふと例の西鶴の浮世草子であります。これは散文でありますが、韻文の方では國文學史上、平安朝に於ける散文源氏物語の作者、紫式部と、韻文を以つて拮抗すべき、近松門左衛門の淨瑠璃と、前の連歌の引續きの俳諧とであります。俳諧が、既に、室町時代に生じて、其の後作者を續出したが、眞趣味を解して、翩々たる俳諧俳句を、優に文學の仲間としたのが、正風の開祖松尾芭蕉であることは、前に申した所であります。以上の三人、西鶴、門左衛門、芭蕉は、實に此の元祿時代を代表する大立物とも見るべく、當代の文學は、彼等及び彼等の亞流によつて、作りなされて居るものと云ふべきであります。文學作以外に此の時代として注意すべきことは、以前の啓蒙時代から、德川氏が大に奬勵した文敎が大に勃興して、學術としての漢學が盛になつたことであります。宋學に於いては藤原惺窩、林羅山が程朱學の系統で多くの學者を出し、その門から博識を以て標榜とする木下順庵が出で、その門下には、五先生十哲が現れる。又復古學

には、伊藤仁齋、其の子東涯、古文辭學には、物徂徠、其の弟子太宰春臺が起り、一方には、中江藤樹が陽明學を唱へ、熊澤蕃山がその下から出ると云ふ勢。しかのみならず、五代將軍綱吉の如きは自ら易を講じて、諸侯士大夫に聞かせ、學校を起し、學者を招聘するといふ譯なので、諸藩も其の風にならふ事となつて、海內の文運大に起り、從つて、治要の道、一に儒學の理想とする所に向ひ、道德の標準社會の制裁も、一に之に依ることゝなつたのであります。漢學そのものは、文學史上、さまでの價値もなく、其等の學者の手に成つた和漢混交文も、破天荒の文字でもありませぬが、社會の表面だけでも、儒敎を重んじて、それが道德の標準となり、制裁となり、理想となつたことは、最も當代以後の文學を解する上に於いても、亦、吾々の今日を解釋する上に於いても、大に注意しなければならぬことであります。此の氣運は、德川氏三百年を通じて支配し、而も、今日迄吾々の心の奧底を支配する一大勢力でありまして、何等かの是非を判斷する場合には、必ず尺度となつて、心の眞先に進み、ことに文學上はに、度々意思を支配して、同情の去就に干涉することが、甚だ多いのです。こ

れは、主に、德川時代の初に、勢力を得た儒教主義が、永く其の力を保存して居るものに外なりませぬ。其の精神の勢力として、漢學が大に注意すべきものであると同時に、又、此の漢學の勃興に就いて、之に關係して注意すべきことは、端なくも其の反動を、次時代に起したと云ふことであるのです。漢學が盛になつて來ると、自然其の學問を生んだ國からまでも崇拜するに至つて、自國の國躰を忘れ、固有の長所をも沒却する事がありうちの事で、或時伊藤仁齋が、其の弟子に向つて、若し孔子が大將軍となり、孟子が先鋒將となつて、兵を率ゐて我が國に押寄せて來たら、其の時御前達はどんな態度を取るかと云つたら、弟子輩默して一人の答ふるものもなかつたと云ふ話であります。が、此の通り、自分の國躰を忘れて、支那崇拜が增長し來るのは、勢止むを得ぬことでありませう。此の風潮に反動して、わが國家國躰を非常に重んずる、さうして、何處迄もわが國固有の精神を發揮して、往かなければならぬと云ふ氣運が起つて來たのであります。大抵世の中の進歩は、物の反動に依つて起るものでありまして、明治の昨今でも、一時西洋心醉の風が行はれると、其に

對して國粹主義が皷吹される、文明が物質的のみに傾かうとすると、其に對して精神的の活動が起つて來る。又、道學先生の說が社會を風靡すれば、ニーツェ主義のやうな說が唱へられると云ふ樣に、凡て兩極端の間を動搖しつゝ、文明が進み往くものでありますが、元祿時代にも、漢學の隆盛に反動し或は醒覺せられて、國粹主義の國學者流が、自然に起つて來たのであります。其の活動の時期は、むしろ第三期に屬して居りまして、其の文學作としては、長短歌、擬古文が多く出ましたが、これも眞の國民趣味の立脚地から申しては、多幸なものであつたとは言ひ兼ねるので、國學者流が、第三期に盛に起つたからとて、沈滯時代てふ性質が、大に破壞されることも無いのであります。殊に、元祿時代には、下河邊長流、僧契沖等の和歌作者があつて、文學としての價値は、決して加茂翁以後の古典學者の擬古的なるの比でありませんでした。唯、歷史的意義に於いて我が國學術史上に於いては、大に重要視しなければならない現象であります。

今、私が德川文學の時代を四つにわけて見ました所で、其に地理的の關係を

京都

一致させる事が出來やうかと思ひます。即ち、第一の啓蒙時代は、京都を中心として起り、第二の發展時代は、大阪を中心として起つたもの、第三の沈滯時代は、京阪の文運の漸く江戸に推移しつゝある間、而して第四の隆盛時代は、江戸を中心として隆盛を極めたもの。この四つの空間的關係であります。まづ、京都は、德川氏の初に、室町の暗黑時代をうけて、天下一般の無智なる中に就いても、平安朝の始から、一千年の間、兎に角に文藝の土地となつて居たものですから、いくら、武門の蹂躙があつたにしても、優美閑雅の風は、おのづから殘つて居り、一種の精神的感化は、どのほとりにか、潜んで居たに違がありませぬ。然も、五山の僧徒は世外に立つて、學藝の保存者として居た所でありましたから、德川幕府創設の際、文敎を興すの場所としては、必ず、まづ、京都の地から着手すべきは自然の事で、京の地も、また、一點の導火さへあつたら、直に再び燃え上らうとする準備があつたのです。それで、實際、林氏の學校も、始は京都に建つたのでありました。先に申した假名草紙も、多くは此の地に生れ、初代の淨瑠璃も、此の地に現れて、後、四方にひろがつたのでありました。で、

大阪

第一期は京都の文學と云つて宜しからうと思ひます。第二の發展時代は大阪を中心としたのであります。此の時代には、將軍が江戸城に腰を据ゑて、既に百年にはなりましたが、廓外の八百八町は、まだ全く整頓しない時代で、新に勢力の代表者となつた參河武士も、まだ腕をさすつて、父祖の手柄話を羨しがると云ふ、殺伐氣の拔けない時代、やゝもすると箇人間の小戰爭に奔走する頃でありましたから、泰平の餘裕があつて、始て榮ゆべき文學は、まだ、此の時代には、江戸に發展し得なかつたのであります。其に反して大阪は、大に好事情を有して居りました。と云ふのは、從來の文學の中心たる京都に、其の距離甚だ遠くない。又、江戸は將軍家の御膝下で、そこに八万騎の旗本が居る、そこへ參勤交替に諸國の田舍武士が上つて來て居るので、素町人の勢力の無いは勿論、大に殺風景な感化をも受けて居りましたと事變り、大阪は、此の時に、大名の管轄ではなく、城代が之を預つてるといふ次第、それに先年、豐臣氏の計畫により、堺の豪商を大阪に移して、商賣繁昌の町としたので、此の以前から堺の商人は、戰國時代文藝の保護所であつた、周防の山口と交通して、

自然に其の方の思想趣味が養成されて居たのが、それも隠微のうちに大阪に移ることゝなり、地位は、南海道、西海道、中國の衝に當り、參勤交代の上り下りの大名は、必ず茲にさしかゝる要路にあたつてますから、自然、金錢の廻りがよく、從つて、夫等の大名の用達をするといふ樣なわけで、江戸の町人とは、まるで狀態を異にして、平民の勢力が非常に强かつたのです。それ故、一般の社會が迅速に發達し、文化も著しく進み、娯樂の道を講ずる事も、大に便宜を得たものでしたから、京都の守舊的な開雅を移して、大に面目を改めた文學を生じたのであります。これが、元祿時代の文學の、大阪に發展した所以であります。近松でも、西鶴でも、其の文學を見ると、よくその社會がわかりますが、試に西鶴などの文學を取つて、室町末年の御伽草紙や、古淨瑠璃に對照して見ると、中々面白い事があります。御伽草紙は、丁度、からだに十二單を纏つて、御籠の中に搖扇でも弱しながら、戀の歌でも覺束なげに詠む御姫樣や、公卿さん達の狀態見たやうなもので、餘りにその動作が表面的、形式的なので、心の中に何を持つて居るか、生きた人間の樣な氣がしないのに反し、西鶴は、全く、其の十二單を剝ぎ落して裸躰にし、心の中をX光線で寫し出した樣なものて、儀式的表面的の裡に、とんでもない社會の眞相を素破抜いて居る所は、眞に奇警と云ふべきであります。その浮世草紙とは、轉變極りない人生を浮世と云ふので、その人生のあらゆる有樣を、憚りなく寫實した所から名づけたのです。西鶴の浮世草紙は、斯樣な性質の書き物であります。それに依つて見ても、大阪の町人の文化の程度、贅澤の程度、總べて申せば勢力がわかります。

第三に起つた沈滯の時代は、寶曆の後から、明和、安永、天明の頃を指して居るのです。此の間は、江戸の方も、年がたつに從つて、素野なる武骨淡も、だん〳〵死んでなくなり、祖先の參河武士も、子孫は生粹の江戸ッ子となるに至つては、川柳の、唐樣で書く三代目の警句にたがはず、武士は武事よりも文事に心を傾ける、諸國の大名は、國元よりも江戸の遊びが面白くなつて、在住者が多くなる、從つて、江戸も次第に繁昌してくる。さあ、かうなると、いつまでも野暮な見台たゝきや、武勇譚だけでは、滿足が出來ない事となり、自然の勢として、

文藝の一段進んでる大阪の文化を入れ、その複雜な趣味に好きを持つて來ることになるのは、怪むべきことではありませぬ。又之を天下一般の勢力から云つても、始こそ大阪が繁昌したとしても、やはり將軍家の膝下は、膝下だけに勢力は動されないもので、素朴相容れない内は如何とも爲方がないが、士人の氣風が次第に優美となつて來た上は、文藝家も同じくば、一つ江戸表で旗を上げて見やうとするに至るのが人情でありますから、此の頃になつては、江戸の文運、漸く起らんとするに至つたのです。之に反して、今まで隆盛を極めて居た大阪文學は、西鶴、近松、三四輩以後、だん〳〵に衰へ初めて、持續はして居るものゝ活動はしないので、從來の文學からいへば、沈滯時代、江戸の文化からいへば、漸盛時代、而して、兩者の關係から云へば、文運の東遷時代と云ふべき事になりました。今、實際に就いて申して見れば、西鶴の後を承けた八文字屋ものは、形に於いては、餘程整頓して參りましたが、奇拔な觀察法に於いては、到底西鶴に及びませぬ。次第に衰微の狀態を現して居ります。それから淨瑠璃は、近松の後に、竹田出雲、紀海音、並木宗輔、近松半二など、多くの

名家が出ましたけれども、此の輩は、唯音樂との調和、舞台面の整頓に心を用ゐて、形式的成功はありましたが、文學としての詩想に至つては、遂に近松以外に出づる事が出來ず、段々陳套に陷つて價値が下つて參りました。殊に明和、安永になつては、東西の大芝居として、義太夫、若太夫、並に多くの作者をして名をなさしめたる、竹本、豐竹の兩芝居が倒れかゝり、近松半二が出て、大勢を回復しやうとしても、大厦の倒るゝ一柱のよく支ふる所にあらずで、數回の起伏の後、遂に廢頽してしまひ、僅に北堀江座などに其の餘波を止めるに過ぎなくなりました。此の間に、江戸では、肥前座、外記座或は結城座などを舞台として、淨瑠璃の作者が多く出て、大阪の人形師淨瑠璃太夫なども、續々江戸に下つて來るといふ有樣でありました。また、和歌和文、總じては國學の上で申しましても、加茂眞淵が、初め、京都に於いて、荷田春滿に就いて學んだ後、寛保三年、京都を去つて江戸に出て、此より大に國學を江戸に興し、多く弟子を敎へて、其の門から名家を出したのも、丁度、この文運東遷時期に當つて居ります。

隆盛時代

第四の隆盛時代は、之は、文化文政年度を中に置いて、上は天明、寛政享和から下は天保以後に亘つてのことを云ふので、元祿時代の隆盛は、大阪を中心としたのと相對して、これは江戸を中心として、文學の大に繁昌した時代であります、此の時代には、淨瑠璃は、勿論元祿大阪の盛なるには及びませぬけれども、大阪は、もう、新作の出るのが稀であつたのに、江戸には、神靈矢口渡や、碁太平記白石噺などの後にも、多少の創作はありました。併し、一般から云へば此の時代は韻文淨瑠璃の時代ではなく、散文小說の時代に移つてしまひました。是も茲で、ちよつと觀察を下すことが出來ます。私は前に、古今の文學作には、韻文まづ榮えて、散文之に次ぐ、箇人の創作時期も、之を縮少したまでゝあるとまで申して置きましたが、その順序に洩れず、德川文學も上期には散文と云ふよりは、寧ろ韻文が盛で、其の代表者とも見るべきは近松の淨瑠璃であります。同時代の西鶴の浮世草紙は、散文でありますが、價値なり勢力なりから見れば、勿論、淨瑠璃に肩をならべる事が出來ませぬ。大勢から云へば、どうしても、韻文時代と云ふ方が至當であります。又、韻文として見のがす事

の出來ないのは俳句でありますが、この十七文字の短詩形が、最も我が平民に適したものと見えまして、數の上から云つたら、最も大勢の人に嗜まれたものであります。之も、元祿時代の名物でありました。然るに下期になつては箇人ならば四十男の分別盛り、情緒も次第に鈍つて、世の中の樣子が實際に身に染んで來る頃の、散文の方が大に盛になつて來たのであります。—初期の小說の喩としては適しませぬが—其の作者としては、明誠堂喜三二、戀川春町などを先驅と致して、山東京傳、其の門に一度贄を執つた曲亭馬琴、それから御旗本の柳亭種彥、滑稽作者の十返舍一九、式亭三馬などが、最も有名なものでありました。此の外に、小說家と銘を打つものは、今日の新聞小說家よりも、つと數に於いて澤山あつたらしく見へます。此の時代には、又、讀本淨瑠璃も行はれ、芝居の筋書の脚本、またそれに裝へて作つた正本製といふものも、小說の一部として行はれました。之は幕毎に、舞臺の構を斷つて置いて、本文は、唯、その舞臺に出て來る人物の對話を以て成立たせたものです。西洋では、それが多く韻文になつて居りますが、日本では全く散文であります。之も

隆盛時代

第四の隆盛時代は、之は、文化文政年度を中に置いて、上は天明、寛政、享和から下は天保以後に亘つてのことを云ふので、元祿時代の隆盛は、大阪を中心としたのと相對して、これは江戸を中心として、文學の大に繁昌した時代であります、此の時代には、淨瑠璃は、勿論元祿大阪の盛なるには及びませぬけれども、大阪は、もう、新作の出るのが稀であつたのに、江戸には、神靈矢口渡や、碁太平記白石噺などの後にも、多少の創作はありました。併し、一般から云へば此の時代は韻文淨瑠璃の時代ではなく、散文小說の時代に移つてしまひました。是も茲で、ちよつと觀察を下すことが出來ます。私は前に、古今の文學作には、韻文まづ榮えて、散文之に次ぐ、箇人の創作時期も、之を縮少したまでゝあるとまで申して置きましたが、その順序に洩れず、德川文學も上期には散文と云ふよりは、寧ろ韻文が盛で、其の代表者とも見るべきは近松の淨瑠璃であります。同時代の西鶴の浮世草紙は、散文でありますが、價値なり勢力なりから見れば、勿論、淨瑠璃に肩をならべる事が出來ませぬ。大勢から云へば、どうしても、韻文時代と云ふ方が至當であります。又、韻文として見のがす事

の出來ないのは俳句でありますが、この十七文字の短詩形が、最も我が平民に適したものと見えまして、數の上から云つたら、最も大勢の人に嗜まれたものであります。之も、元祿時代の名物でありました。然るに、下期になつては箇人ならば四十男の分別盛り、情緒も次第に鈍つて、世の中の樣子が實際に身に染んで來る頃の、散文の方が大に盛になつて來たのであります。—初期の小說の喩としては適しませぬが—其の作者としては、明誠堂喜三二、戀川春町などを先驅と致して、山東京傳、其の門に一度贄を執つた曲亭馬琴、それから御旗本の柳亭種彥、滑稽作者の十返舍一九、式亭三馬などが、最も有名なものでありました。此の外に、小說家と銘を打つものは、今日の新聞小說家よりも、つと數に於いて澤山あつたらしく見へます。此の時代には、又、讀本淨瑠璃も行はれ、芝居の筋書の脚本、またそれに裝へて作つた正本製といふものも、小說の一部として行はれました。之は幕毎に、舞臺の構を斷つて置いて、本文は、唯、その舞臺に出て來る人物の對話を以て成立たせたものです。西洋では、それが多く韻文になつて居りますが、日本では全く散文であります。之も

前に申しました所の、韻文が先に榮えて、散文が之に次いだもので、人形芝居の筋書たる韻文淨瑠璃が廢れて、歌舞伎芝居の筋書たる散文脚本が起つて來たのであります。今日はこれだけにして置きます。

（十二）

德川文學の二性質

今日は、德川文學の性質と種類のことに就いて御話を致します。德川文學は、其の性質の上から申して見ましたならば、二つの性質を持つて居ると云ふことが出來ませう。第一は、貴族的（アリストクラチック）の文學、或は專門的の文學と云つて宜しいか知れませぬ。「アリストクラテック」と云ふ言葉は、普通、貴族政治の意に用ゐてますから、少し不適當の樣でもありますが、誰でも其に與る事の出來るのではなく、或一部分の人の專有と云ふ意味を持つて居りますから、學術の修養ある一部分の人だけに嗜まれた文學は、これを、貴族的文學と名づけても、比喩の名稱としては、差支なからうと思ひます。今一つは、之に對して平民的（デモクラチック）の文學、或は、通俗的文學と名づけることが出來ませう。最も多數な社會の趣味によつて成立ち、從つて、どんな社會にも、どんな人にも、嗜まれる性の文學であります。貴族的文學は、最も少數な社會の趣味によつて成り立ち、それも、學術的研究のないもの、古文學の修養の無いものには、鑑賞する事の出來ない性質のもの、平民的文學は、學問のない者でも、此の時代に生れ、此の時代の普通の狀態に居るものには、あらゆる人に、其の趣味を供給する性質のものであります。文學にして、もし、普徧的性質を條件とするとすれば、それが、國民趣味を脫して卑猥に陷らない限に於いて、社會の最も多くに嗜まれたものが、最も價値があると見なければなりませぬ。されば、今申した二種の文學中で、平民文學と呼ぶ者の價値あるは、云ふまでもない所で、德川文學の特色は、實に、茲に存してるのです。但し、これが、往々、趣味の範圍を脫して、卑猥の極端に走つてる事のあるのは、其の取捨評隲に於いて、文學史家の、最も意を用ふべき所と存じます。偖其の貴族的文學と呼ぶものゝ中には、どんな種類のものが含まれて居るかと云ふと散文の方では、漢學者の和漢混交文と國學者の擬古文とであります。詩の方では、云ふに及ばず、和歌であります。擬古文の標

貴族的文學

種類

準にも、人に依つて種々の時代を採るものがありまして、或人は奈良朝以前のものを宜しいとする、それでは、餘り遠きに過ぎると思ふ人は、平安朝時代の盛な文躰を採ると云ふ具合になつて居ますが、和歌もそれと同じことで、萬葉集を、和歌の精粹として鼓吹した人もあり、古今集を採つた人もあり、或は、後の新古今集を眞似やうとした人もある。又、それではいけない、自分の時代語を以つて、新しい思想を詠み込まなければならぬと云ふ見解を持つた人もありまして、種々の種類がありますけれども、兎に角、其の想像法は、多く古文學(クラシック)の歴史を受けついで、普通當代の趣味とは、大部分に於いて一致しない、其の用語も通俗的でないから、内容が多數人に疏通しないのであります。

趣味

例へば、賀茂眞淵の歌、

さくらばな花見がてらに弓射れば鞆の響に花ぞ散りける

當代一般の時代趣味は、花見がてらに引く弓の響に、はら〳〵と散る櫻花に對して、眞淵翁乃至古文學研究者と、同樣の連想を起しはしなかつたらうと私は信じます。また、香川景樹の

年々に若葉といひてつみしかど積ればこれも老の數なり

果して徳川時代一般の社會は、こんな心細げな見方を、人生の上に向けて嘆息して居たらうか。否々、これらは、古文學に修養を得た人々だけの、單純なる古風の趣味であつて、多數の徳川人士は必ず、

こゝろはおなじ眞砂路の、濱路は臥房(しと)を脱け出でゝ、竭きぬ恨を云ふよしも、納戸の襖は二親の、目覺めぬ程にと心のみ、せかれて逢はぬかたにさへ、なほ憚りの關の戸の、音たてさせじと閾踏(しきる)む、膝は戰へて定めなき、浮世と思へばあぢきなく、悲しくつらく恨めしき、(里見八犬傳)

などに、同情をもつて居たに違がありませぬ。貴族的文學と平民的文學との性質が、大抵これでも分らうかと思ひます。

平民的文學

次に、平民的文學には、どんな種類があるかと申しますと、散文には、小説を主として、他には、俳文狂文などがあります。韻文の方には、淨瑠璃、俳諧、俳句、―連歌を下して俳諧としたのは、この用語を以つてすれば、貴族的より平民的趣味としたものに過ぎないのです。―狂歌、狂句などがありますが、最も價値あ

小說の三系

浮世草子

るは淨瑠璃です。このことは、尙、項を分けて御話する考でありますから、それは玆に略しまして、小說の方だけを、此の項の中で申して見ませう。此の時代小說に三つの系統があります。一つは御伽草紙の系統を引いて、啓蒙時代の無學なる人を導いた假名草紙の系であります。之が段々に發達をして、元祿時代に浮世草紙となりました。其の性質は、前者とは、非常の違でありますが、これは作出の社會と、作者の手腕とにあることで、製本の躰裁などは、全く同樣であります。作者は、例の西鶴でありますが、今日其の全集が、發賣禁止になつてる書でありますから、それだけきいても、內容の如何は大抵分りませう。實世間の裏面、殊に姪事を寫した所が多く、趣味ある事柄を仕組まうの、複雜なる人情を描かうの、としたのではなく、唯、見るにまかせ、聞くに從つて、巷談街說を綴りなしたる、小さい小說の集りで、其の特色は、當時の風俗のありのまゝを寫し、殊に奇警の眼光で、其の裏面弱點を透視し、雅俗混交の文躰で、忌憚なく敍し去つた所にあるので、姪卑の嫌があるが、これは、彼が、殊更にその風を皷吹したわけではなく、寫實された社會が、實際其の通りの姪卑であつたによるのであります。もし、西鶴の不德を責めやうとならば、それに先立つて、まづ、其の社會を罪しなければなりますまい。西鶴の後を繼いで其の門人なども、色々浮世草紙を書きましたが、就中注意すべきものは、之より少し後れて、之を京都の文壇に移した、八文字屋物であります。これは、八文字屋の主人安藤自笑と、江島屋其磧との兩人が合作と申しますが、實は其磧一人の手に成りました。浮世草紙の後を繼て、一層筋立をし、前後を纏めて、小說の躰を備へさせるに至りました。けれども、其磧沒し、其の後に筆を取た多田南嶺も沒してからは、文學者の之に筆をとる者がなくなり、又、京都が、文壇の勢力を有しなくなつてからは、此の浮世草紙は絕えてしまひ、八文字屋の末路は、唯、芝居の評判記などに餘殘を止めて、浮世草紙の出版は、暫く杜絕致しました。其の後、江戸の文壇をかきまはした洒落本、滑稽本は、各其の一部を傳へた物と見てよからうかと思ひます。明治になつて、馬琴などの勸懲小說を排して起つた風俗小說も、或意味に於いては、浮世草紙の系統に屬するものでありませう。小說の三系統のうち第二は、草双紙といふものであります。上方では、

八文字屋物

草双紙

假名草紙から浮世草紙を出して、發達した小說となつてる間に、江戸は、まだ、未開の地で、素朴の趣味をもつて居まして、假名草紙すら、尙、むづかしい狀態でありましたから、文字よりも、目に見て早合點の行く、繪類が流行したのは自然のわけであります。で、社會の變遷さへなくば、室町時代の繪卷物などが、行はるべきでありましたらうが、平民の手には、卷物の普遍は望むとが出來ず、緣起も餘り香ばしく無いので、其よりは、形は卷物よりも冊子脉のもの、內容は緣起よりも童話の面白いもの、御伽草紙のをかしいもの、武人の好きそうな勇ましいものなど、實際をいへば、眞に小供らしいものを、小さな冊子四五枚に繪にして、その餘白に少しばかり、繪解き樣のものを書いたものが行はれました。例へば、其の題目でも、文正、鉢かつぎ、烏帽子折、(此等は御伽草紙から來たもの)、桃太郎、かち〳〵山、猿蟹合戰(此等は童話)、辨慶、朝比奈、金平(此等は武勇談)のやうな、極めて幼稚な御話に過ぎなかつたのであります。けれども、世が次第に進み、人智もひらけ、社會にも色々の出來事が起り、他の文學にも接せる樣になれば、繪双紙も亦だん〳〵進步したものとなつて、怪談をつゞ

る、敵討をつゞる、情話をつゞる、後には繪よりも文學的の發達をして來て、滑稽諷刺までも、此の作の司る事となり、仕舞には一轉して、規模の大きな歷史小說の一躰とまで發達しました。內容の發達は斯樣なものでありますが、草双紙の種類と躰裁とは、どんなであるかと申しますと、この草双紙と云ふ名は、繪を主とした種類の小說を總括して居るので、此の中には、種々の別があります。其の中の第一は、赤本と申すのです。小形の汚い紙で、本文は五枚から成立つて居り、表紙には丹色を用ゐて居るので、其の表紙の色から赤本と呼ぶのであります。內の繪はといへば、これも幼稚なもの、文章はほんの餘白埋めぐらゐのもの、今日のポンチ繪草子ぐらゐのものに過ぎませぬ。これが此の時代の文學、並に挿繪であつたを見ても、元祿享保頃の江戸の文化と、其の嗜好との一部が想像されるではありませぬか。其の後、赤本の表紙を變へて黑本が出來ましたが、內容は一向變らない。唯、表紙を變へたに過ぎませぬ。安永、天明頃になつて、其の表紙に萠黃色を用ゐ、小さい鳥居風の繪紙を上に張り付ける事となりましたが、先の赤本黑本に對して、之を靑本と申します。後

にそれを黄色にあらためたので、黄表紙ともとなへ、或は前の名をついで、やはり、青本とも申して居ります。此の頃になつては、段々内容が進んで來て、前のわけもない童話や、武勇譚、幽靈、怪談をすて、實世間の出來事、また際物を寫し出すことゝもなり、例へば、淺草觀音の開基記念があれば、『開基之賓利生初竹』を書き、碑文谷の仁王さんがはやれば、『拜壽仁王參』『碑文谷四竹節』『碑文谷譚』などを作り、其の時の際物として、面白をかしく、樣子をうつす事ともなりました。また、時世の諷刺もの、例へば、諸侯の遊蕩を諷じては、『文武二道万石通』の作があり、節約の政弊を譏つては、『玉磨青砥錢』などがいでて、黄表紙は、妙に種々の任務を有するものとなり、子供相手ではなくして、次第に文學者の心を勞する物となつて來ました。其の最も盛に行はれたのは、安永、天明でありまして、隆盛期の前驅をなして居ります。其の作者として名あるは、戀川春町、明鍼堂喜三二、芝全交、唐來三和などで、次に山東京傳は、その中興とも言はれた程でしたが、彼が、寛政の始に、洒落本の作の爲に、手鎖五十日に處せられてから、讀本の作に轉じ、その後には、黄表紙の特色を發揮す

べき作者もなくして、また、もとの化物話を種子にし、又は、讀本の趣をかへて敵討物となし、婦女子を顧客とする樣になりました。此の後に、合卷物を生ずることは、後の便に申します。小說系統の第三には、實錄と云ふものがありません。社會は何かの重大な事件が起つた後には、其の事件を記憶に存して置くだけでは、忘れる恐がありますから、之を筆にして傳へやうとする事業が企てられるもので、多少、文筆の心得ある人は、自らの見聞したことを書き殘さうとするのは、ありがちのことであります。實錄の起りは、全くそれでありまして、戰國の時代に、信長と云ふ英雄が出て、豐臣秀吉と云ふ豪傑が現れましたが、それらの身のまはりに起つた勇ましいこと、恐ろしいこと、驚くべきこと、愉快なことを、見聞したまゝに書き綴つて、信長に關しては信長記が出來、秀吉に關しては太閤記が出來たのであります。それから、早雲から五代の北條家が、小田原の城にたて籠つて、遂に秀吉に滅されたことも、大に當代の同情をひく事件でありましたから、これには北條五代記が出來ました。これらは、今申した樣な性質にて、文筆があるにまかせたゞけのもので、文學として

書いたのでありませぬから、其の文章の、拙劣にして見るに足らぬことは、言ふまでもありませぬ。けれども、社會の出來事を、兎も角も書き記して置くなどは、德川時代の前期に於いて、價値あることゝ云はなければなりませぬ。今日では、こんなものを書いて置いたとて、誰も見るものがありませぬが、其の時代には、珍らしき英雄傳でありますから、大に人々から注意されたと見へまして、其の後、此の殺風景な信長記、太閤記を燒直し、その文章を作り變へて面白く讀まれるやうに修飾を加へたものが出來て、それが其の時代から世の中に弄ばれる事となり、此等と同性質で、將軍家なり、諸大名の家なりに起つた權力の爭奪、繼嗣の問題、所謂御家騷動をも記錄にして、憚つて版にはしないが、寫本として行ふ事となりました。これを、實錄物と申し、之が、事實を離れて、小說的の仕組になつたものを、讀本と云ふのであります。その故は、同じ小說でも、草双紙は、繪を主として、文章は其の從たるに過ぎないのに反し、此は、事實を記載する所から、文章はそのおもなる部分で、繪はそれを助ける性質のものでありますから、繪を見るのではなく、文章を讀むとの意で、讀本の

名を負うた譯であります。此の讀本の起原には、淨瑠璃の作が影響を與へて居るらしく思はれます。また、從來の戰記文學、殊に太平記などが、種々の模範を示し、神田白龍、馬場文耕などの講釋師によつて、潤飾を試みられた事も多からうと存じます。その種類には、戰記、敵討、武者修行、一代記、御家騷動、政談など、色々の事實ものがたりがありましたが、讀本と見るべきものゝ始は、近路行者の作、『英草紙』『繁々夜話』でありませう。其の後、上田秋成の『雨月物語』や、建部綾足の『本朝水滸傳』、平賀鳩溪の『風流志道軒傳』、その外、村田春海、石川雅望等の國學者にも、二三ありましたが、小說としての讀本の躰を備へたのは、山東京傳が、黃表紙、洒落本から轉じて、『忠義水滸傳』を作つた時からであります。けれども、其の價値に於いて、大に推すべきは、『八犬傳』『弓張月』『南柯夢』『朝比奈巡島記』などを書いた曲亭馬琴であります。此の頃になつては、既に、繪の方も大に發達して、讀本も草双紙におとらず、繪を精巧にするに至りましたが、尙、草双紙は、婦女子を重な相手として、假名を以つて綴り、餘り文章を要しませぬ間に、讀本は、やはり、文學的作物の特色をあら

合卷物

正本製

社會の二面

はして、當代の士君子にも顧られ、亦一般の人も、社會と共に進みまして、此の趣味を悅ぶことゝなり、此の時代には讀本全盛を極めることゝなりました。されば、繪を主とした草双紙も、おのづから此の傾に影響をうけて、讀本にまがへるまでに筋を長くし、從來の十冊を二冊にまとめ、一冊五枚づゝのを二十五枚位にし、美しい口繪などを入れて續刊する事となつたので、繪と文章と、梅櫻を兩手にするものゝ如くか出來ました。即ち合卷物と云ふのであります。其の名は、草双紙五卷を一冊に合したと云ふ意味であります。此の類の作者で有名なのは、源氏物語を翻案して、諺紫田舍源氏を著した柳亭種彦であります。種彦に、また、正本製といふ小說があります。これは、合卷物を芝居の台帳に擬して綴り、卷中の挿繪を當代役者の似顏にしたものです。

德川文學の精神上に、貴族的と平民的とあるのと、或點まで一致して、當代社會に、表と裏とあることを知らなければなりませぬ。文學は、よく其の消息を洩して居ります。鎌倉時代は、平安朝の反動として、比較的沈痛なる宗教が勢力を得て居りましたが、室町時代になつては、それも次第に平凡になつて、禪

も、淨土も、密教の思想を混入し、幼稚なるだけに人心は尙其の混沌たる宗教に信仰をつないで、其の教理をば、自己の理想と心得て居りましたが、德川時代になつて、百餘年の太平を過ぎて、文運江戸に盛ならんとする頃になつては、いとゞさへ平凡なる佛教が、世間的發達に敎ふる所の次第に少くなつて來る所から、見はなすとてはないが、一般の俗人の眞摯な信仰を支配する事が出來なくなり、わが固有の樂天性、快濶性が、漸々頭をもたげ出し、其の傾向の小說をも產し、極端に陷つたものは、肉慾的、挑發的の醜文字ともなつたのであります。これが、社會の裏面を形作る有力なる勢力でありました。然るに、社會の表面を成すところの士君子は、勿ろん、早く、佛教の支配を脫却し、幕府の政道が、支那聖賢を理想とするにともなつて、漢學儒教を武士道德の標準とし、其の精神は、漢學者のみならず、政務の當局者のみならず、國學者でも、神官でも、いやしくも一人前の人間として、世に立つ程のものは、ことごとく其の教義を奉じ、其を以つて社會の制裁とする有樣となり、之より引いて、一四夫の上にも、一平民の上にも、其の制裁を應用せんとするまでに至つたので

洒落本

ありますで、德川時代の精神系統は、一面に、佛敎の迷信を控へては置きながらも、其は、活動なき形式だけでありまして、他面の活動としては、表に儒敎主義が行はれ、裏に樂天性、快活性、肉慾性が發展して居たものと見るべきであります。さて、其の樂天的で快濶なる精神の、小說に現れて來た形はと申しますと、其は、前にも、ちよつと、名だけが出ました洒落本であります。之は、遊里に於いて遊をする狀態を寫出すことを主にしたもので、通言を振廻し、洒落をいふのが其の特色で、人生の趣味と云つては、殆ど無いと云つてもよい位、唯深く考へる事のない、遊蕩の寫眞に過ぎないのですから、劣情を誘ひ、風俗を壞亂するものたるは、言ふまでもない所、其の甚しきことは、文藝倶樂部の寫眞版や、文藝界の夜の京坂どころの事ではありませぬ。併し、これが、此の時代の人に歡迎され、野に一人の之をあやしむものゝ無かつたを見れば、一般の時代精神が、形式的の佛敎や、固苦しい道學先生の、相談にも何にもなつたものゝで無かつた事がわかります。德川時代を考ふる者は、綿服、麻上下、大小嚴しく、鐵扇を斜に構へた士君子の後には、こんな社會があつたと云ふことを忘れてはなりませぬ。然も此の風は、儒敎主義が平民の領分までも染みこんでると同時に、上士君子の心の底をも犯して居たので、今日資料の取調の結果、案外の現象を發見することがあります。洒落本には、斯樣な社會的觀察の外に、國語學上の研究材料を求める事も出來ませう。と云ふのは、この小說は、全く、遊里界の寫實でありまして、其の對話は、通人でも、番頭でも、又、遣手でも、幇間でも、さう云ふ人間が、各々自分の有して居る言葉を使ふ、其の言葉を直寫した言文一致躰の文章でありますから、言語調査には、此の上なき材料を供給するものと云ふべきものです。洒落本の有名な作者は、山東京傳です。彼は初め黃表紙を作り、後に讀本をも作りましたが、其の天才のあらはれたのは、此の洒落本にあつた樣に見うけられます。此の洒落本と相並んで、同じく、樂天的の性質を現したものは滑稽本であります。これは、洒落本の如き、餘りに猥褻なものではありませぬが、滑稽の種の伏在する所は、遊里のことを書かないにも限らず、世の中の不釣合、偶然の出來事、社會表裏の狀態などで、滑稽の趣あるべきことは、殆ど求めて之を材料として居りまして、其の行文は、洒

滑稽本

人情本

落本などと同じく、口語の直寫であります。而して、その描寫に奇警な點はありますが、複雜なる人生の眞滑稽ではなく、深き透觀を要せずとも、平凡人の日常生活に、往還の上でも目擊し得る樣な、可笑的鎖事に過ぎないので、一言にして之を評すれば、淺薄の二字に盡きる事と思ひます。眞の人生には、もつと深い意味の滑稽があるべきを、當代の平民者流は、人生を一の御座興程にしか思つて居なかつたのであります。滑稽本の作者で有名なのは、『東海道膝栗毛』を書いた十返舍一九、『浮世床』『浮世風呂』の作者、式亭三馬、それから、『八笑人』『和合人』の作者、瀧亭鯉丈なども名があります。洒落本の性質は此の如きものでありましたから、寛政の初に、風俗壞亂の禁令に逢つて、作者と本屋とは處刑され、本は絶版を命ぜられ、暫時は、洒落本の作が中絶致しましたが、人情の求むる所は致し方のないもので、天保になつて、其の變躰なる人情本と云ふものがあらはれました。洒落本は、遊里の通を振り廻すのが趣意で、首尾の纏つた一の事件狀態を描くことではなかつたのですが、人情本は、前の寫實の風を擴張して、通人以外に、處女、老婆、俠客、商人、下女、小僧等の言語

風俗までも寫すことゝなり、纏つた筋の小說となつたのであります。しかし、淫靡の人情狀態を暴露するのがその特色で、此の作者狂訓亭爲永春水は、風俗壞亂の隊長と云ふべきです。先に、西鶴物のことを申しましたが、西鶴の浮世草紙を書いた時代は、道德の標準が低かつたので、自分はそれを當り前のことゝ思つて書いたのでありますから、其の風俗壞亂は、餘程罪が輕いのでありますが、爲永春水になつては、決してさうではないので、此の人間の盛りの天保の頃は、社會の秩序も整ひ、道德の標準も定り、殊に前年白河樂翁の爲政にて、書肆蔦重、作者京傳の先例もある所なのに、意識的に此の罪惡を犯して、世の人々の弱點につけ込み、姪猥なる風を助長して、自己の利益を得やう喝采を博しやうと云ふ、あさましい了見から、名を狂訓亭に籍りて、姪事の寫實を試みたので、此の方が餘程罪が深いと云はなければなりませぬ。太平の餘風、德川時代自らこゝに至つたものではありますが、文藝を用ゐてこの魔事を行ふに至つては、春水は實に、美の賊として、獅子心中の虫として、征伐しなければならぬ男であります。其の因果應報、風俗壞亂の罪で、家に禁錮せら

れ、憤悶の末病を得て死んだと云ふ末路も、自らなせる業であります。

德川時代の平民趣味が、斯の如く快濶的樂天的で、その極は、趣味を脫して、直感的肉慾的の者に墮落したのでありますが、此の輕快なる樂天性は、小說以外にも表顯して居るのです。其は、貴族的趣味の和漢混交文や、擬古文を茶化して、其の勿躰らしい所に滑稽の觀察を下した、所謂戲文といふ者であります。又眞摯なる和歌を崩して狂歌とし、俳句の趣味を打碎いて狂句川柳としたのも、皆、此の洒落本滑稽本に頂點を示したる、輕快の精神に基づくものであります。茲に至つては、もう「子のたまはく」も「やまと歌は人の心を種として」も「諸行無常是生滅法」もあつたものではありませぬ。實に、幸福な生活とも申しませうかげれども、眞面目に文學史家の態度をもつて對すれば、此の傾向が、眞の人生の上に、如何なる意義を有して居るか、吾人の數千年來養ひ來つた民性に、如何なる位置を占めて居るかだとへば、これが國民の本性の一部を暴露したものとして、此の文學が、吾人の趣味をどこまで滿足させる事が出來得るかと云ふ事。此等の點は、大に反省を要すべき所と思ひます。深き

心の透察を有して居ない思想、餘りに日常生活の表面だけに過ぎない想像は、從つて淺薄なる趣味の外、有する事が出來ませぬ。然るに當代は、儒教の勢力は士君子社會を橫傾して、其の手を平民の上にも及ぼした事は確で、社會の現象として、文學の資材として、此の精神の關係をもつて現れたものが甚多く、彼等の輕文學が反映してるよりも、更に深き人生觀世界觀の、此の時代にあつた事が明であるのに、此等の複雜にして價値ある趣味は、彼等の想像に浮べられず、勿論筆にする事も知られなかつたので、遂に此の如き薄つぺらな味の少いものとなり終つたのであります。これは、彼等が修養の足りないにも起因してますが、亦卑俗なる部分に迎へられやうとした、惡い傾向が、此等當代に著しく、爲に、豐富なる思想意思感情を、想像の要素として採用する事を忘れしめたに起因して居る事と思ひます。私は、其の性質に於いて、全然同じであるとは申しませぬが、わが明治今日の小說界の欠點も、或點まで、以上の忠告によつて補はるべき所があらうと信じます。流石は淨瑠璃の近松讀本の馬琴は、此の一流の上に拔け出でて、士君子の思想意思をも想像の

近松馬琴の價値

元質とし、複雜なる諸性格を盡して、或點まで宇宙を一曲一卷の小天地に縮寫し得たのは、其が千古に價値を有する所以であります。馬琴の勸懲主義の如きは、唯其の餘弊に過ぎませぬ。今日の小說界、殊に鑑賞界が、此の主義の反動に成れる輕佻の風に靡かされて、多く此の大家の眞價を認めず、從つて此の風を皷吹するものゝ無いのは、甚だ遺憾の次第であります。

（十三）

淨瑠璃節の起原

唯今は、淨瑠璃に就いて御話を致します。淨瑠璃の起りについては、色々說がありまして、まだ明かなことは分らないのでありますが、俗に、小野お通が淨瑠璃物語を作り、之に節をつけて語る事となつてから、其の後にも、この節を以つて語るものを、悉く淨瑠璃と唱へるのだと言ひ傳へて居りますけれども、其の淨瑠璃を語ると云ふ言葉が、小野お通の時よりも、前に、（もつとも、お通の傳も諸說紛々でありますが）あつた所から見ると、お通の作と云ふことは信ずることが出來ませぬ。併し淨瑠璃と云ふ言葉が、淨瑠璃物語を節にて語

詞章

三絃

操

ることに起つたものであると云ふことは、確かであらうと思はれます。此の淨瑠璃物語は、お伽草紙の一種類でありまして、足利時代の末に出來たものらしく見えます。或は、十二段草紙とも云ふのです。もとは、盲法師の平家を語るなどから出たものでありませう。或學者の、謠曲の節と關係を說くのには私は贊成する事が出來ません。淨瑠璃が、謠の節を更に美化したのは、餘程後の發達かと考へます。始はまことに單純な節で語り出したもので、語物も殆ど此の草紙だけに限つて居りましたが、後には、舞の草紙、――幸若舞の詞章――の『高館』『八島』『大職冠』や、御伽草紙の『鉢かつぎ』『文正』『梵天國』の類をも此の節で語る事となり、かくて語手も上手に、節も次第に發達して參りましたが所へ、永祿の頃、三絃が我が國に渡來し、之からこの三絃を淨瑠璃に合せてひくことになり、音樂的に、一段の進歩をしました。然るに、茲に、また、傀儡子といふものがあつて、これが昔より、操人形を遣つてるものでありましたが、此の人形の所作を、三味線に合せて語る淨瑠璃節に結付けて、三者集合の一藝術が成立することゝなりました。これが、從來の物語を推しすゝめて、戲曲的（ドラマチック）の

組織を見る一段階となつたのであります。今では、其の名殘が僅に大阪の文樂座の人形芝居に遺つて居るのみでありますが、此の形の發達したものは、一時、德川時代を風靡した所の、大勢力ある文藝であつたのです。文藝とは、廣い意味の美術で、唯文學のみではなく、之に三味線も伴ひ、淨瑠璃節も伴ひ、又人形の所作も伴つて居る、一種の集合體たる事を申すのです。

再び前に立歸つて、淨瑠璃の發達の道筋を御話致して見ませう。謠曲が、足利時代の中頃から末にかけて大に行はれ、其の後に接した位の時代に於て、今申しました淨瑠璃物語が、一つの節を以て語られる事となりましたが、此の音節が、平家物語などにならつて生れ出たと云ふ事の外に、何物か指導或は誘引を爲したものであるまいかとは、史家のまづ思ひ至る所でありませう。此の時既に、說經と云ふものが、一種の語りものとして存して居りました。とは、今日諸方の寺院などに行はれて居る說敎の樣に、むづかしい佛敎の敎理を、わかり易く無學のものに說ききかせるものでありましたのが、此の時代に語物となつた說經は、さうではない、名は說經であるけれども、實は名を

有難いことに藉りて、色々な面白をかしい事を語る、云はゞ羊頭をかゝげて狗肉をうる底の藝術でありました。又祭文（サイモン）と云ふものがありました。今日でも田舍などに參ると、岩見重太郎一代記とか、或は元和三勇士とかの話などに節を附けて語るに、間には貝を吹き、錫杖を振りたてゝ、素朴な趣味に喜ばれて居りますが、あの祭文は、元は韓退之の祭田橫墓文などと同じ名の、修驗道の祭文で、神官の方でいへば祝詞に節を附けたものと云つて宜いでせうか。其を段々崩して來て、尊みもむしろ滑稽になり、時好に投ずるやうに節を附けて、阿呆陀羅經擬ひになつてしまつたのでありました。それから外に、歌念佛と云ふものもありまして、是は南無阿彌陀佛の六字名號や、生死の事がらの哀れッぽい事を、悲しげに歌つたものらしく見えます。――いづれも、今日からは、明に知ることが困難ですが――此等の歌念佛であるとか、祭文であるとか、もしくは說經であるとか、かやうに俗に投ずるやうになつた歌ひもの、語りものゝ節付けは、必ず淨瑠璃節の成立、後にはその筋立にも、多少の部分をなしたものと推測されるのです。且つ、人生の一大事を談じ、或は神格に

奉仕する、眞摯なる精神を茶化した此等の俗文藝の行はれた事實は、此の時代に、眞の信仰が無くなつて、德川時代に輕佻樂天的の文學を生み出す傾向、及び源流を、茲に示して居ると云ふことが出來ます。種は佛敎から來て居りますけれども、その主義を皷吹するのではなくして、全くのなぐさみものとなつたのであります。

さて、此等種々の節を參照した時代の、淨瑠璃の文學は、單に一篇の物語に過ぎず、文體はまた、寧ろ散文的のものでありまして、七五の調、或は五七の調、或は三四の調など云ふ規定のある文章ではなかつたらうと思はれます。今日此の時代に語られたものと云はれる十二段草紙の各段、舞の草紙の『和田酒盛』『堀川夜討』、『百合若大臣』『烏帽子折』『大職冠』『伏見常盤』『八島』『高館』など、御伽草紙の『文正』『酒顚童子』『鉢被』『梵天國』『物臭太郎』などを見ればよくわかりますが、一種の散文物語で、脚色を有する戲曲的作物では勿論ありませぬ。其處へ三味線と云ふものが、外國から渡つて來たのであります。年代は永祿年間と云ふのが普通の說でありますが、其は確と申すことが出來ませぬ。又、其が、琉球から渡つたのであるか、或は、西班牙から渡つたのであるか、或は、葡萄牙から渡つたのであるか、諸說判然致しませぬが、兎に角三味線が渡つて來て、今迄は扇を拍子に取つて語つた淨瑠璃に、撥音面白く合せて奏することになつて來たのであります。其の名手は、慶長頃の琵琶法師の澤住檢校及び瀧野檢校であつたとの事でありますが、其の合奏法は、やはり、平家に於ける琵琶の樣なもので、唯合の手と拍手とに用ゐたもので、未だ音譜と調和した、今の典雅曲折はなかつたことは確でありませう。併し、これは、淨瑠璃節進步の一階程たるには相違なく、斯く三味線に合はせるやうになつた時に於いて、淨瑠璃節の文句が、また、餘程韻文的になつて來たのではないかと思ひます。韻文的とは、三四の調、五七の調、七五の調などの、言葉數の規定を云ふので、例へば、三四の調と云へば、都々逸の文句のやうなのですが、歌曲に一定の口調、言葉數の定まりが出來て、其の形が、淨瑠璃文中に多くなつて來たではなからうかと思ふのです。勿論、文字の數に過不及があつても、音の伸縮によつて其を整頓するのをも計算しての事ですが、其の所へ澤

住の門人目貫屋長三郎といふものが、西の宮の傀儡子引田と云ふ者と相談をして、其に合はして人形を使ふことを始めました。傀儡子は、平安朝の昔からあつたもので、俊頼の歌を鏡の宿の傀儡子が歌つてあるいたといふ面白い話もありますが、戰國時代にも、西の宮の外に、淡路に人形遣が居て、淨瑠璃を語つて田舍を廻つたとの說もあります。併し、此等の初期の狀態、人形の遣ひ風、音樂との調和、文章の筋立などは、どんなであつたかは、明に知る事は出來ませぬが、人形が、文章の性格を表して對話をなし、或は地の文の所作をする事だけは、あつたらうと思はれますので、之より詞章の結構に筋が出來、次第に戯曲的の發達をなす事になつたのであらうと思ひます。或說には、淨瑠璃には三味線は離す事の出來ない關係を持つて居るが、操は、之に必須的のものでは無いとの考もある樣でありますが、私は、淨瑠璃が一篇の草紙から戯曲的發達をなすに至つた重なる理由を、操人形の結合にあるものとして、操をも離すことの出來ない要素と考へて居ります。戯曲的の發達には、勿論室町から戰國時代に盛に行はれ、殊に豐臣氏の保護奬勵に與つた謠曲も、少からぬ指導をなして居るに違ひはありませぬが、それ〳〵の裝束をして、目の前に所作を演ずる操人形が、其の所作の爲に詞章音節を變化せしめ、後代の大成に至らしめた事が、無いとは言はれまいと思ひます。これは、餘程後の事に屬しますが、大阪の人穗積以貫が、其の著難波土產に、親友近松門左衞門の言をのせて

某往年近松が許にとむらひけるとき、近松云ひけるは、惣じて淨瑠璃は、人形にかくるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句皆働きを肝要とする活物なり。

と見えてるのも、この消息を示してるものでありませう。かくて、文章、音樂、所作、相合して不完全ながらも、淨瑠璃と云ふ一種の集合美術を作り上げるに至りました。

此の時代の淨瑠璃は、主に京都を中心として發達したのであります。其の後、女の淨瑠璃語の、六字南無右工門、左門よし高などが出て、以前の舞草紙や、御伽草紙だけではなく、別に新作ものも出した樣でありましたが、尙、此の新氣

運は、從來の既經祭文などを歴する迄には至りませぬでした。然るに、澤住の門人に薩摩淨雲と云ふもの、其の師について淨瑠璃節を學び、此の技藝を齊して江戸に下つて來、大に薩摩侯などに稱讃されて愛顧を蒙り、其の門下に、は、虎屋源太夫、櫻井丹波少掾、杉山丹後掾などの、四天王と云はれる名人を出したので、淨瑠璃節は、茲に大に發達するに至りました。其の後、此の淨雲の本系に、大薩摩と呼ばれる淨瑠璃節の一種が出來まして、それが今日でも、歌舞伎で出語りをする呼びものゝ樣になつて居りますが、唯、澁いといふだけの事で、審美眼から見ては、他の諸流に優るものではありませぬ。櫻井丹波少掾は、普通、和泉太夫と云ひ、力のあるにまかせ、淨瑠璃も強い事が得意で、手には二尺ばかりの鐵の棒を持つて拍子を取つたといふ話、その子も親について和泉太夫と稱し、語る節から人形の所作まで、荒つぽい事を好んで、當時野朴な江戸の風に嗜まれました。其の筋は、御承知の金平物語でありまして、剛勇無比なる坂田の金平の手柄譚、人情の、趣味のと、そんな段には參りませぬで、たゞ、わけもなく強い主人公の、理想的な働きであつたのです。此の節を金平節と申します。これを以つて見ても、德川初期の江戸は、中々文學の發展をゆるすべき、社會で無かつた事が推して知られるのであります。主なる作者は岡清兵衛重俊でありました。

薩摩淨雲

金平節

相弟子の杉山丹後掾は、師風を受繼いで淨瑠璃を語り、其の流から、江戸半太夫節、またその下から、十寸見河東節が出て、元祿、享保以後、大に江戸に行はれましたが、文學としての其の詞章は、先師以來の御伽草紙種や、謠曲文に羽翼を付けたり、平民趣味を注入したりしたぐらゐの事で、甚だ價値のあるものては無く、作者に名家もありませぬでしたから、當時上方に盛を極めてる、巢林子近松のそれと、比べになるものは無かつたのであります。唯、節としては、今日までも河東節として、東京生粹の淨瑠璃として殘つて居ります。淨雲の門下中で最も注意すべきは、虎屋源太夫であります。彼は、江戸に於いて、淨雲に淨瑠璃を學んだ後、京都に上つて之を語り、其の門から多くの名人を出したのであります。就中注意すべきは、伊勢島宮內、井上播磨及び山本角太夫、この三人であります。伊勢島宮內の門から、宇治加賀掾が出まして、彼

半太夫節

河東節

宇治加賀掾

井上播磨掾

竹本筑後掾

は、源太夫の齋らした節に修正を加へ、弱々として優美な、京都嗜好に適する樣に語り始めたので、大に京都に勢力を得、自ら文才のある所から、新作も少からず出しました。又、近松門左工門も、京都在住中、彼の爲に筆を取りましたが、まだ茲には、門左工門の特色が表れませぬので、此等は古淨瑠璃の部に屬せしむべきものであります。井上播磨掾は、大坂に旗を揚げて一流を始めましたが、これも中々勢力がありました。其の門に清水理兵衛があり、又其の門に、天王寺の五郎兵衛、藝名は竹本義太夫、後受領して竹本筑後掾があります。これが、即ち、古來の諸流を綜括してその粹を抽き、百餘年の今日までも、淨瑠璃界の牛耳を取るに至つた、義太夫節の開祖であります。其の修行中は、宇治加賀にもつき、井上播磨にも接して、從來の古淨瑠璃を語つて居りましたが、根城を大坂に構へて、正々堂々と打つて出づるに至つては、大詩人近松門左工門の筆に成れる新淨瑠璃を語り、文學の近松と、音節の義太夫と相待つて、實に千古の盛觀を現ずるに至つたのであります。其の座を竹本坐と申します。其の弟子に、若太夫といふのがありましたが、別に芝居座を起して師の節

豐竹越前少掾

江戸肥前座

一中節

豐後節

を語り、後受領して、豐竹越前少掾と申し、其の座を豐竹座と云ひました。此から以後は、兩座相並んで義太夫節を語り、座附の作者には、竹本座に、近松の後竹田出雲、長谷川千四、三好松洛、近松半二等、豐竹座に、紀海音、並木宗輔、爲永太郎兵衛等、其の他多くの名手を得て、其の作は、德川文學中に最も價値あるものとなりました。豐竹越前少掾の門から出た、豐竹肥前掾は、江戸に下つて肥前座を組織し、同じく義太夫節を語り廣めました所が、節なり文章なりは、到底素朴なる江戸育ちの及ぶ所でないから、其の勢は、江戸生粹の淨瑠璃を壓倒し、外記座、結城座も、義太夫節を興行し、作者にも、平賀源內の福內鬼外、三井元之助の紀の上太郎、その外、松貫四、烏亭焉馬等を出し、茲にも一と花を咲かせました。

更に前に還りまして、山本角太夫は、南京操の小細工にて、一人氣を取りましたが、其の門から、都太夫一中の一中節が出ました。これは、今でも語られる節であります。又、其の門人宮古路豐後掾は、江戸に下つて一流豐後節を語りました所、其の音節並に詞章が、まことに婬卑で、一時非常に社會にもてはやさ

常盤津節
清元節
新内節

れたが、風俗壞亂のかどで禁止されました。然るに、太平の餘、世の好む所は如何ともし難いもので、先に小說の所で、京傳の洒落本が、禁止されて、春水の人情本があらはれたと申しましたと殆ど相似て、豐後節の後身に、常盤津文字太夫の常盤津節が、相かはらず婬聲を弄して語られたのであります。其の下からは清元延壽齊の、清元節が語り出されました。いづれも今日に語られる節です。常盤津と相並んで豐後節から出たものに、富士松節がありました。其の門から、彼の哀れつぽい、鶴賀新内の新内節が表れました。然して、山本角太夫から分派した此等の淨瑠璃は、義太夫節の如くに、首尾一貫の大規模ある戲曲作と、相伴つて存立したものではなく、多くは單純な古淨瑠璃を語り、或は說經などを多少改作したものだけで、獨創と認むべき物はありませぬ。殊に、江戸に這入つてからは、狂言作者が多く筆を取り、別に芝居を立つる事はなく、常に歌舞伎に隷屬して演奏されるか、若しくは、單に音節として嗜まれるかに過ぎなかつたのであります。今日でも、大歌舞伎には、大切所作事とか何とか云つて、常盤津連中、もしくは清元連中な

長唄

ど云ふ事のあるのは、この隷屬を示して居ります。これは注意を要する事項であります。其の事は後に申すつもりです。此の頃になつては、歌謠の進步した長唄も、餘程戲化を受けて戲曲的の性質を生じて來、歌舞伎に伴つて音樂の一部を形作つて居りました。併し、其の詞章に至つては、模擬、襲用、殆ど見るに足るものはありませぬ。

歷史の概略は其の位に致して、文學作の內容について、一二の注意を申して置きます。淨瑠璃節の始めて起つた時代は、舞の草紙や、御伽草紙、時としては說經の文をそのまゝ語つたものなことは、前に申した如くであります。其の後、德川の初期になつて、そろ〳〵新作ものが出來るやうになりましても、やはり舞の草紙、御伽草紙の內容なり文躰なりを脫することが出來ず、同じ樣な題目に、例の廻り遠い秀句などを得意にして、通り一遍の戀や、本地を語るのでありました。もつとも、作者に天才を得た太夫は、早く此の舊套を捨てたのでありましたが、保守的な氣風の京都に語られ、然も、作者に文學者を得なかつた山本角太夫、並にその門下、(これは大坂でも一時流行らせました文

古淨瑠璃の題目

佛教

彌節)の正本、素野にして趣味の開發しない文運東遷以前の江戸淨瑠璃などを見ますと、どこまでも此の臭味は付き纏つて居るのであります。茲で、文例を示し結構を御話してゐる暇がありませぬから、唯、當代の無學の教訓者として、御伽草紙の一特色となり、說經と其の性質を同じうする佛教が、如何に執ねくつき纏つて居たかを、題目の上だけで示して見やうと思ひます。まづ、新作『阿彌陀の胸割』を語つた六字南無右工門と云ふ男の名のやうな女は、其の名からして既に此の傾向を示して居りますが、それは、まあ、別と致して、山本角太夫が一生中に語つた淨瑠璃名目を通觀して見るに、『天親菩薩』『傳教大師記』『女人往生記』『善光寺開帳』『天王寺彼岸中日』『四十八願記』『日蓮上人德行記』『三世二河白道』『因幡堂開帳』『西敎寺七万日回向』『花山法皇順禮記』などがあり、井上播磨及びその弟子清水理兵衛などの語つたものに、『二王の本地』『祇園精舍』『道釋禪師傳』『長谷寺利生記』『大念佛由來』『五大力菩薩』『東大寺大佛緣起』の名が見え、岡本文彌の流の興行には、『源恕上人記』『曇鸞太師記』『阿彌陀坊』『日蓮上人法難記』『中將姫蓮曼陀羅』『三田八幡御傳記』『長命寺開帳』『中山利生物語』『善光寺開帳』『三十三間堂棟由來』などの外題が、大部分を占めて居ります。其の外に、宇治加賀及び其の門下や、江戸淨瑠璃の一流を檢すれば、尙甚だ多くあるし、題名の傳說的歷史的のものでも、御伽草紙の內容の如くに、此の抽象理想を締結として、興味を添へやうとしてるものは、亦甚だ多いのであります。以つて、元祿以前の上方及び、文運東遷以前の江戸の古淨瑠璃の性質が、わかるのではありませぬか。茲に、不世出の天才近松巢林子の詩筆によつて、全くその面目をあらため、幼稚なる趣味や、露骨なる興味を轉じて、文化の人々の同情を支配し得る、新趣味の作物たらしめられたのであります。勿論、近松にも、此等の題目を採つたものが無いではありませぬ。又古淨瑠璃や御伽草紙の改作も有りは致しますが、作意、趣味に至つては、固より同日の話ではありませぬ。此が、新古一紀元の立つ所で、此からの上方淨瑠璃と、暫く後れて此の氣運を受得した江戸淨瑠璃とは、皆此の風を尊奉することゝなりました。德川文學に淨瑠璃の特色あるは、此から後にあるのであります。

題目や筋の出所について御話を致しましたついでに、尙、淨瑠璃の材料のことを、少々注意して置きたいと思ひます。それは、材料を謠曲に採つたのが非常に多いと云ふことであります、近松が出世して、在來の面目を改め、古淨瑠璃と新淨瑠璃との境をなしたと、前に申しましたが、近松作の中でも、普通には、貞享三年に、初めて竹本義太夫の爲めに、出世景清を作つたのが、新淨瑠璃の始めで、其の以前のは彼の作をも古淨瑠璃と稱へて居ります。まづ、近松以外の古淨瑠璃に就いて見ると、『隅田川』『阿漕平次』『王昭君』『三條の小鍛冶』『浦島太郎』『石童丸』『源氏供養』『神道蟻通』『土蜘蛛退治』『田村將軍はつ觀音』『大織冠智略の玉取』『弱法師』『源三位頼政』『佐々木藤戸の先陣』『日向景清』『齋藤別當實盛』『自然居士』『東岸居士』『今樣柏崎』、それから、謠曲には七曾我とも申して、五郎十郎の敵討かありますが、同じく夫れを材料として色々の曾我ものが、出來ました。此の外にも、算へればなほありませうが、是等のものは、謠曲の中にあつた所の題目や、筋を用ゐて、多少其の姿を變へ、事件を複雜にしたり、時代を改めたりして、其に淨瑠璃の節を附けてうたひ、三

味線に合せ、人形にかけて演じたものであります。是に於いて、再び謠曲の事を少し申さなければなりませぬが、謠曲は今より五百年以前に出來たものて、我が國の劇詩と云ふべきもの、不完全てはあるけれども、兎に角に其の形を備へて居るものてありますから、もし、後世に、劇詩として生るべきものがあつたら、必ず多少の模範を之に得べきは、自然の勢と云はねばなりませぬ操の所作を入れて仕組の發達をするに、能の演伎が模範を示したらうとの事は、前條に申して置きましたが、仕組のみならず、內容の材料、形式の文體も之に倣ふ所が數々あつたのは、明な事實てあります。まづ、內容について申せば、今に殘存する謠曲三百番は、今迄の我が國に起つた歷史事實、及び、神話傳說、—古文學に記載しあると、口碑に存すると、若しくは本邦固有なると、外國種なるとを問はず。—の、苟も一曲に仕組んで、當代の趣味に投じうべきもの、又は、興味に訴ふる結構の材料たるべきものをば、殆ど網羅し盡して居るので、言はゞ、文學の材料たるべき歷史、神話、傳說、巷談等は、一々それ〳〵の符牒を付けて、一旦謠曲と云ふ問屋の大倉庫の中に藏ひ込まれた樣なものて、其の

近松の取材

後來るべき文學時代の戯曲或は小説は、謡曲以後の社會に起つた事件を描寫する外に、面白い材料を得やうとするには、是非、大問屋謡曲に、其の卸を願はなければならなかつたのであります。之に比べては、同じ倉庫でも、御伽草紙などは、まことに小さいもので、蓄藏の品物も價打がずつと降つて居りましたが、淨瑠璃の初期には、貧乏世代で、趣味の立派な品を使用するわけには參りませぬでしたから、初は、粗末な御伽草紙種で間に合はして居て、だんだん修養がつみ、身代が出來て來た所で、天和、貞享頃から、そろ〳〵謡曲種が買ひ込まれたる樣になつたのであります。文體もまた、之に準じて知るべきであります。就中、繰廻しのよい者は近松門左衛門でありました。近松の文章の成立、並に趣味の進歩を研究することは、面白い問題でありますが、其の傳については殆ど明でないから、其の作の順序によつて之をうかゞふ外、爲方がありますまい。説經、祭文、俗歌、童謡、悉くその材たらぬはありませぬ。又、その古淨瑠璃『天皷』の中に、狂言記の釣狐を、文章ながらまる取りにして用ゐて居る所もあり、謡曲の文そのまゝを對語なり地の文なりにした所も甚だ多く

近松の特色

今日では、剽竊と云ふ文學者の不德を行つて居るのですが、さて材料の卸賣は如何と見ると、これも中々少くはありませぬ。まづ、今申しました『天皷』、それから、『世繼曾我』『增補藍染川』『源氏烏帽子折』『主馬判官盛久』『頼朝七騎落』『出世景清』『佐々木大鑑』、『多田滿仲記』『新本領曾我』『團扇曾我』（松風村雨）『東帶鑑』（頭に二つ列べて書くのを角書きと云ひます）『蟬丸』、『吉野忠信』『双生隅田川』などは、謡曲の題目により、又其の材料を襲用したものであります。併しながら、流石は近松でありまして、唯、謡曲の題目や材料を襲用し、文章を剽竊するだけに止まつたのでありませぬ。それでは大、天才近松の、近松たる値打がないのでありますが、彼は其の修養によつて、更に謡曲以前の古文學や傳説の根源に遡り、而して、其の天才によつて、從來の謡曲や古文學の筋を、一層戯曲的のものにし、趣味の存すべきは存し、入るべきは入れ、彼の單純にかふるに、これの複雜を以てし、千變万化、神出鬼沒の妙を極め、巧に之を綾なしたのであります。彼の價値ある所以は、全く茲にあるので、古淨瑠璃の次第に進化はしつゝあるものゝ、長く稚氣を脱することの出來なかつたの

に別たれる點てあります。けれども、近松の特色は、これ以外に無いものと思ふのは至らないのです。以上は全く、彼の時代物、即ち歴史的材料によつて組み成した、史劇のみについての事でありますが、彼の作には、尙、未だ、うかゝひ及ばない世話淨瑠璃と申すのがあります。當代社會の人物を主人公として、其の性格のまはりにまつはる事がらを曲にしたもので、時間の薄ものを通してながめる史劇とは、同情のよせ方、趣味の性質に於いて、大に異る所があります。――史的人物も、當代化されては居るとしても――て、時代物に、事件の複雜を率ゐる整然たる條理のあることは、彼の曲の特色として、他にわかたるべきものには相違ありませぬが、尙、最大の長所は、世話物の上に表れて居るのです。もつとも、世話物は、德川時代に這入つて、近松に始まつたものではなく、平安朝の物語などは、この一種でありませうし、謠曲にも、放下僧、望月の復讐もの、舞車、水無月祓の戀愛ものなどは、確に世話物と云ふべきであります。又、德川文學でも、その時代の出來事を讀賣で知らせたり、唄祭文に綴つて唄つたりすることは、多少第一期から行はれて居ましたし、之を歌舞伎芝居に、際物として演ずる事も、元祿頃には始まつたのでありましたから、世話を題目にして仕組む事は、必ずしも、近松の創見では有りませぬけれども、德川時代の活歴を詩化して、文學としても、美術としても、趣味の豐富なるものと爲すに至つたのは、全く彼の技の外にありませぬ。元祿十三年の正月に、近松が『長町女腹切』と云ふものを書きました。これは、全く其の時にあつた事件を材料として淨瑠璃としたもので、近松が世話物に筆を附けた最初のものであるのです。又、元祿の十六年の五月には、『曾根崎心中』――お初德兵衛の情死――を書きつゞりましたが、これは、近松の、此から特色を顯はすべき、心中物の最初のものであります。で、古來近松の三傑作と申して『國性爺合戰』『雪女五枚羽子板』『曾我會稽山』此の三つを數へて居りますが、これらは時代ものとしてはさること乍ら、彼の妙技を論ずべき第一義としては、如何であらうかと思はれます。むしろ、文學的に見て、近松の傑作は、世話物心中物にあることゝ信じます。先に申しました『曾根崎心中』それから『心中天の網島』『女殺油地獄』『槍の權三重帷子』『博多小女郎波枕』『丹波與作』、此の外にも『おふさ德兵衛

重井筒』など、名作が澤山ありまして、いづれも近松の面目を顯はし、詩想文藻の豊富なことを示して居ります。而して、彼には、殆ど百番からの作があるのでありますから、中には詰らない部分のあるのも、免れない所であります。が、想の無量にわき、筆の止る所なく走る勢は、到底後人の企て及ぶべからざる技倆と云はねばなりませぬ。時としては、其の才事にまかせて、却つて内容を傷けた所も、往々に見えますが、そんな細事は、此の大詩人を輕重するに、何等の力をなすものでありませぬ。近松の價値評論は、世上少くありませぬから、此の位にして置きます。然し、まだ、史家の研究すべき餘地は、甚だ多く存してる事を忘れてはなりませぬ。

近松以後の劇界

時間が切迫して參りましたから、近松以後の淨瑠璃の、大勢だけを敘べませう。近松によつて淨瑠璃の作が一新され、元祿文學の花が、茲に咲き初めるに至りましたから、既に出來上つた此の地盤を踏み占めて、淨瑠璃の作者として世に立つものが、是よりだん〳〵に出る樣になり、操の人形に改良を施し、舞臺道具に意匠をこらし、且つ、其の遣ひぶりも、巧妙になつて參ると同時に、

文學と音樂との調和、舞臺面の配置などにも心を用ゐ、詩形として、戯曲の約束を整頓することが、餘程進歩して參りました。之には、竹本坐と豊竹坐と、兩坐並び立つて互に競爭をした事が、與つて力あつた樣に見受けられます。けれども、其の進歩とか整頓とかいふのは、取りも直さず、漸く内容を離れて、形式の沙汰に亘つたことを表示して居るので、元祿文學の趣味は、殆ど、近松の大才によつて發揮され盡して、其の後に出でたる名家の諸作は、唯その趣味を異る形に於いて綾なしたゞけに止り、新趣味として、多く其の上に附加へる所のなかつたのは、恰も和歌が古今集に成りて、次第に形式に進み、後、新古今集に及んで、形式の成功を見た樣なものであります。淨瑠璃も、また、作者に

作者

松田和吉、竹田出雲、長谷川千四、三好松洛、竹田小出雲、吉田冠子、竹田外記、中村閏助、近松半二（主に竹本座）、紀海音、西澤一風、並木宗輔、安田蛙文、爲永太郎兵衛、淺田一鳥、梁塵軒、並木正三（主に豊竹座）など、其外數へれば夥しい作者が表れ、

大夫

淨瑠璃語りには、竹本播磨少掾、竹本大和太夫、政太夫、頼母、此太夫、豊竹越前少掾、豊竹新太夫、若太夫、出水太夫、河内太夫、などの多くが揃ひ、

三味線

三味線には、野澤、

竹澤、鶴澤の諸名手があり、人形には、吉田文三郎父子を最として、桐竹、津山の連中があるといふわけで、元祿の後期、元文、寛保、延享の頃は、其の盛行決して、和歌の製作多き新古今前後の有樣に劣りませぬでしたが、これも、實は、近松に啓發された趣味の範圍を、精密にした位の事で、操の演技とても、高が木偶の坊の着物を立派にし、足を付け、目を動し、眉を動し、耳を動す等の小細工に、所作が巧になつたと云ふだけで、別に、新精神が吹き込まれて、生き物になつたわけでもなければ、その發達には度合があるもので、例の吉田文三郎などの妙手に、型が出來上つてからは、此の形式が、新古今集後の沈滯の如くに、推し移つて、一般の趣味は、やう〳〵、操芝居から離れやうとするに至りました。それも、無學の國民なら、師範家の敎權に服從してることもあるんでせうが、いよ〳〵進歩し行く自由の趣味は、到底いつまでも之に我慢をしてゐる譯には行かず、他の價値あるものに、轉じ往くことになつたのであります。加ふるに、音樂としては、初代竹本義太夫の創定せる曲節が、優に後輩の獨創を痲痺せしむる力があつて、異る趣味を出さしめず、異る趣味を出す事の出事ない

程の太夫輩には、五十年後の同情をつなぎ得べき手腕は、勿論望みの外にあり、作者も前申した通りて、詞藻の近松に並ぶべきものがなく、唯、その設計を彫琢するに止まりましたから、其の想の欠乏する所は、享保八年、竹田出雲、松田和吉が、『大塔宮曦鎧』を合作して以來、此の作法が次第に流行し、其の弊として、一曲の五段或は、十冊を、數人にて各場の受持を定め、各短い自分の受持にて、喝采を博しやうと心掛けた結果、段毎にヤマの重複が起り、揮然大成を期すべき、全曲の首尾は、支離滅裂に歸する樣なことになつて來たのであります。實に、彼等が、全曲まとまつた所で、大なる趣味が成立つ事の見通しが付かなくなり、狹い想像の範圍にて、俗受をしやうとの邪道に這入つたもので、これも原因となり、結果となり、淨瑠璃の衰頽を招くに至つたに違ありませぬ。斯くて、寶暦から明和にかけては、文學的創作萎微し、節も人形も珍しく無くなり、坐附太夫は田舍を廻り、江戸に下り、また、大坂に歸つても、毎々不入が押しつゞく事となり、故作を二度三度繰返して、作新の拙を補へども、やつぱり其の甲斐がなく、竹本坐の殿將、近松半二等、勇を皷して明和三年、『本朝二

十四孝』を作し、四段目に引御御殿のせり上げを工夫して、そんなことで當りを取り、十月に『太平記忠臣講釋』を出して、珍しい評判にはなりましたが、それもそれだけ、今でも有名な『關取千兩幟』も、其の時には散々の不評判で、後暫くして竹本坐は退轉して、跡は歌舞伎芝居となり、豐竹坐も相次いで倒れることゝなりました。其の後、兩坐覺束なくも再興の事あり、竹本坐には、明和八年、半二必生の作『妹背山婦女庭訓』の際物當込が功を奏し、非常の大入を得て、また〳〵三四十年の命脈を保つことが出來ましたが、趣味眼より見れば、まことに陳腐なもので、操淨瑠璃は、明和以後、もう文藝史上、生存の意義を有しない樣になりました。自然の勢とはいへ、一時榮華の夢も、覺めての後は果敢ないものであります。

退轉

操衰頽の一因

操淨瑠璃の衰頽には、前に申した數々の理由がある外に、元祿以後漸く發達して來た、歌舞伎の勢力を忘れてはなりませぬ。即ち、歌舞伎が漸々時代の嗜好に投じて、操淨瑠璃の顧客を奪ひ去つたと云ふ事であります。歌舞伎の起原發達については、次に改めて申さうと思つて居りますが、これに關係した

著しい點だけを、かいつまんで申して見れば、元祿以降、歌舞伎狂言がだん〳〵行はれて參りましたにも拘らず、操芝居の依然として盛行して居たのは、全く、作者に、近松以下の名手の輩出したのと、辰松小山吉田等の遣ふ人形振りが、見ものだつたとの外に、三味線に合せて語る淨瑠璃節の、餘程發達したが音樂趣味を持つて居たからに因るのでありました。之れに比べては、歌舞伎はまだまだ幼稚なもので、能樂めいた囃や、色を主とした舞ひ姿の單純なことは勿論、物眞似狂言づくしを、野郎の演ずるに至つても、生き物は其處に自負の弱味が伴つて、趣味の障りとなることも數々あり、やう〳〵演技や筋に於いて、操淨瑠璃に倣ふ所があつたものゝ、尙々、之に並行することの出來なかつたのは、歌舞伎本來の性質が、文學的創作を待たない傾のある外に、此の時代に著しい發達をなしたる音樂的趣味の、到底、人形芝居に較べる事の出來なかつた爲であらうと思はれます。然るに、寶曆、明和以後になりまして、前申した通り、操芝居が陳腐となつたのに引きかへ、歌舞伎狂言が次第に發達して、參り前の單純な歌舞伎や、能狂言の流を改良して、技まず〳〵進み、淨瑠璃

の筋の外に其の音樂をも取込み、樂器も三味線を使用し、臺詞も表情の文も、淨瑠璃芝居がいりとなり總じて操の長所は出來るだけ收めて歌舞伎の演伎中に取込まれるまでに至りましたから、今や其の優劣は之を演ずる舞臺と所作をする役者との上に判斷さるべき事となつたのであります。無生の木偶と多年修養の俳優と、見物の同情に訴へる勢力如何は、今更申すも野暮な次第であります。

餘りに手間どりましたから、江戸淨瑠璃の話は御預りとして置きます。

（十四）

最後に、演劇のことを御話致します。西洋の演劇は、全く、舞台の上に登つた人物の對話だけで成立つて居るもので、少しも音樂が這入つて居りませぬが、日本のは、それと性質を異にして、隨分音樂が演劇の中に這入つて居ります。即ち、チョボて三味線をひき、大皷をたゝき、唄を唄ふ。また、床の淨瑠璃も這入る、或は大薩摩の出語りが這入る、又所作事には長唄とか常盤津とかの連中を、呼び物にしてると云ふ風て、多くの音樂の分子が這入つて居り、その上、寫實にはあるまじき、一種の形を演じて居ります。尤も、餘り見ともない、美感を傷つける樣な事をしては、西洋だつて演劇になりは致しませぬが、日本のは殊に形を主として、一擧一動、悉く此の精神を脫しませぬ。されば、形は、日本演劇の特色であるとの議論をする人もある程てありまして、兎に角、日本の演劇は、それらの雜多の性質を持つてるものてあります。次に、文學の方から見て、西洋の演劇は、其の脚本は韻文て、詩て、眞の劇詩てありますが、日本のは、全く散文てあると云ふ違ひもあります。今、どうして斯樣な特色が我が國の演劇にあるかを申述べやうと思ふのてありますが、其の間に、自然、演劇の歷史成立を、御話することとなりませう。

平安朝の末から、鎌倉時代に於いて、今ならば、藝妓、其の時代の白拍手が、今樣を、歌つて舞を舞ふことが、盛に貴人の間に弄ばれて居たのてありましたが、それが、足利時代の末頃になつて、今樣は小唄と云ふものになつたのらしい。謠として、今樣の末路を示して居る小唄が、室町時代以後に盛に行れたら

阿國歌舞伎

傾城歌舞伎

しい、のであります。―實は、此の間の關係には、まだ私の研究がとゞいてませんし、白拍子の末路、どうなつたのか明でないのでありますが。―足利時代の末頃に、出雲國の巫女に、阿國と云ふ女が京都に上り、僧衣をまとひ、佛語の端を歌のうちに唄つて、「やゝ子踊」と云ふ念佛踊見たやうなものを舞ひ踊り、將軍にも神樂として上覽に入れ、公衆にも見せることを始めたのであります。是も、德川以前の稚氣と、佛敎の狀態とを示す好證例でありませう。其の後慶長の頃に、名古屋山三郎と云ふ風流男と、手を携へて演舞をするに至つた前後から、文藝の趣味も多少開發して來たと見えまして、佛語をかへて、小唄を唄ひ、又、淨瑠璃もどきの歌を作つて、舞をすることゝなりました。是より能の狂言に似寄つた、滑稽なども演じましたが、重なるは、色々に裝束をして、歌をうたひ、舞を舞ふことにあつたので、一坐を整へて京都に芝居小屋を拵へ、また、慶江戸へも下つて其の伎を演じ、大に世にもてはやされました。これを歌舞伎と申します。今の木挽町の芝居を歌舞伎坐と申すのは、之を直に其の名目にしたのです。處が、此の歌舞伎が、中々面白かつたものだから、其の頃、京

若衆歌舞伎

都の遊女町の島原邊で遊女どもがそれに眞似て自分等の仲間を率ゐて、歌舞伎の踊を試みることが、段々起つて來たのであります。唯、箇人として客を喜ばす爲てはなく、思ひ〳〵に自分等の一坐を拵へて、四條河原邊に掛け小屋をし、公衆の見物に供する事となり、そのうちの一二坐が江戸にも下り、吉原や中橋で興行し、能がゝりに三味線も彈いて、つまりは都踊見たやうな事をしたり、小唄を唄つてひとり舞をしたりすることでありました。かくて吉原の娼妓にも、それに眞似て歌舞伎を演ずるものが出た程で、かく、賣色のもの、、盛んにもてはやさるゝに至れば、自然風俗壞亂の弊害を生じて來るのはもとよりのことでありますから、以前から、幕府は、度々干涉をしては參りましたが、三代將軍の時になつて、斷然女淨瑠璃などゝ一緒に、女歌舞伎を禁止しました。其が、丁度、寛永六年であります。之に代つて行はるゝに至つたものは、若衆歌舞伎と云ふものであります。これは、鎌倉以來の風として、僧侶や武士の間に、見目よき少年のもてはやされた習慣を利用して、いつの頃よりか、女歌舞伎同樣に行はれてたのでありますが、左樣の少年を若衆と云ふの

野郎歌舞伎

て演藝を若衆歌舞伎と申しました。所が、寛永六年、女歌舞伎が禁ぜられるに及んで、この若衆、歌舞伎が代つてだん〳〵勢力を得て、世に行はるゝ樣になつて來ました。併し、其の演伎は女歌舞伎と全じく、小唄の舞を重として、餘り甘いものでなかつたらしく、藝よりは、容貌を以つて賣る方に力を用ゐ、技藝を磨くことが疎てあつたらうと思はれます。また、其の少年が方々に呼ばれて、酒色の相手をするので、それも風俗を害する所から、慶安五年に、この若衆歌舞伎も禁ぜられることゝなりました。さあ、女歌舞伎も禁じられる、今又これも差止められる、それでは商賣があがつて仕舞ふと云ふので、其の商賣を營んで居る者が、上に嘆願をして、やう〳〵の事にそれらの少年の前髪を落して、色氣を無くし、これから藝で興行をする事となつて、又歌舞伎が許しを得ました。役者が、皆野郎頭に結うて居るから、それを野郎歌舞伎と云ふ事になりました。今までは踊りが下手でも、容貌が美しければ宜かつたから、技藝に勉める事が疎かつたが、此の時になつては、だん〳〵藝で賣らなければならない所から、一般に藝術を勵んで來る事となりました。これは、藝術の進歩

内容の發達
小唄
物眞似

から、大に慶すべきことゝ云はなければならないのであります。

茲に、少し前に遡つて藝風の事を申さねばなりませぬが、女歌舞伎の時は名の如く、小唄今樣を歌つて舞ふのが主で、餘藝として、色々可笑味の物眞似、言はば茶番めいた、形の滑稽をちよい〳〵演じたのですが、苦衆歌舞伎に至つても、勿論歌舞が主で、小唄にも

文がやりたや室町筋へ取りや違へて餘の人に遣るな花のかの樣のサテ花のかの樣の手に渡せ(室町)

しだれ柳の葉の露落ちて淵となるまでもん身に添はゞ物を思はじサテ物は思はじ世は何事も(葉の露)

など、數々の文句があつて、姿優しく舞つたのでありますが、此の頃には、既に形の物眞似より進んで、能の狂言の滑稽な筋を演ずる事を容れ來つた事を注意しなければなりませぬ。けれども、此の筋を演ずる事と、歌舞をなす事とは相並び伴なつたので、未だ大に調和するには至らなかつたらしいのです。所が、野郎歌舞伎になつては、歌舞の俳優が抒情詩的の舞をなすだけに止ら

歌舞と狂言との結合

ずして、敘事的の藝を勉め、更に進んで從來の物眞似狂言をも演ずることになつて、其の間に歌舞をも編み入むと云ふ樣な譯で、單なる滑稽の外に優美の趣を加へ、之より眞演劇の起るべき途筋を示して居ります。これは、歌舞と狂言との調和融合の第一歩で、この性質が、取りも直さず、私共の今日の演劇の特色を成してるものと見るべきであります。即ち、西洋の演劇と異つて、われの音樂的に舞踏的なのは、もと女及び若衆の歌舞の起原から來り、寛永十年に、杵屋喜三郎が從來の囃子に、始めて三味線を入れたのは、其の後の歌舞伎の音樂的性質を補成したものでした。是から、長唄の發達ともなるのであります。すが、今は其の事は省いておきます。脚本の散文的なのは、主に能の狂言の散文的なのから出て居ると、斯う見る事が出來ませう。尤も、或る時代の脚本には、御伽草子から來たもの、亦は、淨瑠璃と同質のものも無かつたのではありませぬが、一般には、前申した起原、三つ兒の魂が百歳の今日までも殘存してるものと見られます。既に、此の如き性質でありますから、此からの野郎歌舞伎の發達は、常に筋の進歩と共に、歌舞的の所作の進歩を伴なひ、演劇の藝風はどこまでも、寫實と云ふよりは、美的の形を尙び、亦、大切に所作事などと云つて、巧妙な三絃合奏の純然たる歌舞を呼び物にして居るのは、今日でも然る所でありますが、これは、以前の大歌舞伎の特色なのであります。例へば、或る劇評家が、俳優には最も踊りの素養が無ければならぬ。流石に團十郎の藝は、圓熟したその踊の素養が土臺になつて居るので、舞臺が大きいが、八百藏などになつては、藝は甘くとも踊の修養が無いので、舞臺がどうも小さくていけない。其の外の者に至つては、言語道斷であると、氣焔を吐かれた事がありましたが、之は確に、わが歌舞伎の特色を、一面から言ひ表してるものと言つてよいのです。物に狂うた女の振舞でも、決して、見つともない樣子をする事は、歌舞伎の許さない所、天に仰ぎ地に伏すにも、必ず美的の形を取ります。また、大立廻になつても、眞實の組んづほぐれつは、最も避ける所で、一上一下虛々實々、左を排へば右にかはしなどゝ、節をつけて讀本を讀む樣な擧動をする事が、諸君の御承知になつてる事と思ひます。兎に角、今日の壯士芝居とは、大に其の往き方が違つて居りますが、其の所以はと申せば、前に說い

た歌舞の起原にあることは、明な事實であります。勿論今日の複雜な發達まで、には、操人形の型や、能樂の型を模範とした事は、少くないのであります、が、斯樣な型を採用する性質そのものは、確に歌舞より來つたものであるのです。

さて、又、もとに還りますが、かく野郎歌舞伎が流行する事となつた時に、能の狂言まがひの筋の外に、傾城買の樣子を演ずる事が始りました。歌舞伎女を弄び、若衆を寵する低度の社會趣味は、つまりこんな演藝を迎へるに至るのは、怪むに足らない所であります。其の筋と云つても全く簡單なもので、例へば、「只今傾城買ひの始り」と口上があると、買手に扮した役者が、一尺七寸の脇差を向ふへ落ちるばかりに指して、張り肱に扇といふ體で、橋掛からユラリ〳〵と出て、正面に立ち、八幡これが買手でやすと、扇で脇差の柄を叩く。すると見物が一同に、そりや買手の名人が出たわ〳〵と、聲々に譽めると云ふ譯、實に馬鹿々々しいではありませぬか。其所へ一方から、揚屋の亭主が古袴を着、手拭を腰に、貝杓子をもつて出て、アヽ、旦那御出でかと滑稽の風、買手は、まだ太夫は見えぬかと云へば、イヤもう彼へ、もう追付けこれへ御出で、と橋掛

を眺めて、アレ〳〵只今是へ見えますと云ふ。茲に見物は、ヤレ傾城が出て來るといふので、腰を立て直し、靜まりかへつて揚幕を眺めつめる。時分はよしと出て來る女形、まだ今の樣な鬘もなく、唯一人あらはれて、大盡樣御出でかえと言ふ。見物は大喜びです。それから、大盡と互に手を執り、座敷が始り、亭主は酒盃を持ち運ぶとなれば、酒の肴に太夫樣一曲の舞所望々々とあつて、其の內に、準備して置いた囃方がずらりと列ぶ。是て女方が舞の所作をするので、狂言一番の終となると云ふ。眞に味も趣もあつたものではありませぬ。まして、演劇は、縮寫せる小天地だなぞの名言は、どんと御話にも何にもならないのです。又、之を見ても、歌舞音樂が、狂言中に主要の呼び物であつた事も分るでありませう。それはさておき、時好といふは妙なもので、此の傾城買の狂言は非常に流行となり、傾城町の地名の島原は、直ちに歌舞伎狂言の異名の如くに心得られる事ともなり、當時の狂言の標題に、『髮切島原』、『坂田島原』、『八島島原』、『安宅島原』など見えて居ります。後には、此の風も、風俗に害ある所から、明暦元年に幕府の布告によつて、禁止されましたけれども、狂言全般

續狂言

の禁止てはありませぬてしたから、茲に、演劇は他の形に於いて發達するこ
とゝなりましたのは、喜ぶべき事てす。
從來の狂言は、歌舞ても滑稽事ても、もしくは兩者を結び合したものても、傾
城買ても、いづれも一番づゝてまとまる離狂言て、丁度淺草公園の見せもの
ゝ樣な、一ときりづゝに交代する事てありましたが、それては趣が少いから
と云ふのて、一つの筋を長く、二幕三幕と續けて演ずる、所謂續狂言が始まる
ことゝなりました。されば、たゞ、わけも無い事を三幕もつゝけさまに演ずる
わけにもいかないから、是非何とか、首尾のある複雜な筋を、仕組む事とな
らなければなりませぬ。これが、脚色の一大進歩てあります。正保二年に、江戸の
山村座て、都傳内といふ作者が、『今川忍び車』と云ふ二番續の狂言を出した
のが始て、其の幕間には、能の狂言の樣に、『竹生島』の所作、即ち歌舞を演じて
大當りを取りました。之は島原禁止の少し前てありますが、島原禁止となつ
てからは、方々の芝居にても續狂言を作する事となつて、材料は重に歴史や、
緣起や、謠曲などから取り、又例の仇討をも仕組んて、一日見の芝居となしま

藝風の進歩

荒事

した。曾我の狂言も三番に仕組まれて、第一箱根權現登山、第二箱王丸元服と
母子別れ、第三夜討となつたのてありますが、これは、謠曲の元服曾我、小袖曾
我、夜討曾我など、各一番づゝのものを、一つに聯絡さして演ずる事となつた
のて、これは、脚色に於いて、確に能樂などよりも進歩したものとなつたのて
あります。これは、主に、江戸ての事てありますが、大阪ても、寛文四年に福井彌
五衛門なる作者が、續狂言を始め、有名な『非人仇討』は其の手に成りました。
脚色は此の如く、材料も斯く、眞面目な人生の一部を寫す事となりましたか
ら、其の藝風も、大に改らなければならぬ勢となります。讐討など云ふ人生の
慘事には、猿若の滑稽は殆ど何の用もありませぬ。女舞の優しい姿ては、とて
も敵役はつとまりませぬ。是に於いて、作中に出て來る種々の人物を眞面目
に寫し出す、女方、花車形、立役、敵役、或は和事師、荒事師などの特種の藝が始ま
るに至りました。此の荒事について、申して見る事があります。それは、延寶の
初に、初代の市川團十郎が荒事を始めたと云ふ事てあります。彼は、もと、下總
成田在のものて、十五才の時、海老藏の名て初舞臺をつとめましたが、彼は女

方ではなくして立役でありました、前に、淨瑠璃の話をした時分に、江戸の薩摩淨雲の後に、四天王の一人たる櫻井丹波、その子和泉太夫が、非常に荒ッぽい事を好み、強い節を語るので、彼等の爲に其の作者の岡清兵衛が、坂田の金平を大立物として曲を仕組んだのが、金平ものであると云ふことを申しましたが、それを、人形に合はせて使ふ時分に、勇ましい所作をするのです。それを初代團十郎が思ひ付いて、其の金平の活動、人形の働を、生きた人間の團十郎が自らやり、顔の隈取りを移して演じ、それが即ち市川家の荒事となつたのであります。是等を見ても、從來の優しい女めいた踊よりも、勇ましい所作、從つて立役が重んじられるに至つた事と、操人形と演劇とは、唯だ筋ばかりでなく、文章ばかりでなく、所作の上にも大に關係があることが分るのです。是に付いて附け加へて申して置きますが、今日でも歌舞伎芝居を見ますと、折々滑い物として人形振と云ふことをやります。活きた人間が、黑いものを冠つた者や、肩衣をかけた人間に押へられて、全くの人形となつて出て來る、それが糸を引くと、或はお輕なり、或は勘平なりが、手を動し、頭をふり、目を上げ、肩を下げ、種々と人形の如くに所作をする。それを人形振と云ひますが、之を旨くやるのは、藝の餘程達したものと云つて誇つて居ります。かく、操人形と演劇とは、種々の點に於いて關係があり、後には互に師匠となり、或は弟子となつて居ると云ふことは、明かなことであります。

時代物

歌舞伎の始は、傾城若衆の舞、夫に能の狂言から來た滑稽の所作が模範となつたのであります、から、現在社會の世話を演じたのは、自然の勢で、又混沌たる時であるから、御伽種の時代物ともつかぬものを演じたのでありました

世話物

が、眞の演劇として見るべき歌舞伎は、續狂言の時代物に始つたと云つてよからうと思ひます。前に申した。『今川忍車』や『曾我』などはこれであります。此の時代物が出來て、其の次には世話物が出來て參りました。この世話物の盛に出來たのは、やはり德川文學の最も盛な元祿時代でありまして、其の作者としては、彼の近松門左衛門などが此の方でも有名な一人であります。で、此の元祿時代に、嚴密な意味の世話狂言と云ふのは、前の島原狂言と、餘程趣を同うして居る所の、傾城買の事に關した狂言であります。前に踊りとして、唯

一片の物眞似としての傾城買が禁ぜられましたけれども、太平の元祿時代でありますから、續き狂言となつて、暫く其の餘熱のさめた時分に、此の傾城買の續き狂言が出來て來たのは、自然の事とも申しませうか。例の、夕霧伊左衛門などを題目としたものが、此の時に大喝采を得たのでありました。坂田藤十郎と云ふ名人は、此の芝居を、卅二ヶ年間に、十八度演じたと云ふ事であります。此の外に、『傾城玉手箱』、『傾城江戸櫻』、『傾城阿波の鳴戸』と云ふやうなものが出來たのですが、今日でも、隨分、狂言に、傾城何々といふものが、澤山ありまして、別に傾城買のことでもなければ、傾城が主人公となるのでもないものに、斯く傾城と云ふ題目を附けるのは、唯、古の歷史をそのまゝに受けつぐと云ふだけに過ぎない、殆ど世話と云ふ位の意味に用ゐられて居るのです。げれども、世話となると、必ず傾城が其の中に出て來るのは、日本の芝居の通性である樣です。例へば、『極御近づきの』て申して見れば、『白石噺』には吉原揚屋の段などがあつて、宮城野信夫の對面、『先代萩』には高尾が出る。『忠臣藏』にはおかるが出る、こんな固苦しいものでさへ、皆斯樣でありますから、も

狂言作者

つと、にやけた世話に至つては、始終其の關係で、もちきつて居るのは論もない事、時代物の曾我の對面にさへ、虎少將が、兄弟に配した錦上の花として出て居るのは、大に世話化したものであります。此等を以つて見ても、當時傾城が、社會上に驚くばかりの地位を持つてた事、人々から非常の同情をよせられて居た事がわかるのでありますが、世の文學史家たるものは、當代の世話人事が、單に傾城に關したものゝ外に、詩題とするに足るものが無つたか、もしあつたとすれば、演劇の材料には、なぜ傾城ばかりを採用したか、此の採用された材料と、其の取り殘された事がらとが、國民趣味に如何の說明を與へるか等を、研究して見なければなりませぬ。私は、唯、それだけの御勸めに止めて置きます。

同じ樣なことではありますが、次に、文學の方面に這入つて、どんな人々が作者で、どんな作があつたかと云ふことを、少しく申します。續き狂言の出來ます以前の作者は、其の名が殆ど知れませぬ。或は全く知れないと申しても宜いので、最初の歌舞の詞章は、多く、一片の唱歌に過ぎないし、作には、今知れて

るものには、前に云つた『室町』、『葉の露』の外、『鹿の子』、『木の下』、『三島』、『千歳山』など凡そ二十ばかりもある。或は、物眞似狂言盡しは、頓智の思ひつきで、能の狂言めいた事をするに止まり、(作に『猿若』、『浪人盃』、『氏神詣』などがある。)少し眞面目な所で、お伽草子の種をかへ、『酒呑童子』、『河内通ひ』などこれかと思はる。(又は、傾城買の樣子を振舞ふだけでありましたから、格段に其の作者を言ふまでもなかつたものと見えます。それから、續き狂言が出ましても、元祿以前の作者は、まだ能く分りませぬが、『今川忍び車』を拵へた作者は、都傳内と云ふ人であります。然かして、此の『今川忍び車』の出來るまでの狂言には、脚本と云ふものが有りませぬでした。脚本は、其の所作をする土臺となる本で、元と根本と云ひ、亦、臺帳とも云つたものであります。斯樣なものが、其の以前には無かつたので、大凡の筋が定まつてをれば、塀に上つた役者が、出合頭に何か言つて、それで濟むと云ふ、誠に簡單なことで、特別に文學的才能ある作者によつて、委曲の結構、趣味ある言詞が、連ねられるなどのことは無かつたのであります。其の後、立派な筋書の出來たのが、『傾城淺間ヶ嶽』と云ふ

ものであります。それから段々に文學作が表れる事になりました。此の作者は、或は近松門左衛門ではあるまいかとの疑があるのです。其の文章を見ると、誠によく出來て居て、淨瑠璃に近い文章もあるのです。で時に依つたら、近松門左衛門であるかも知れないと云ふ考であります。其に次いだ作として、は、『津るがの津三階藏』、『姫藏大黑柱』、『傾城佛ヶ原』、『龍女淵』などの作、是は確に近松門左衛門が、名優坂田藤十郎の爲にした作であります。其の後は、近松は專ら淨瑠璃の方に移つて、脚本の作を爲さなかつたのであります。其の後、引續いて作を爲したものは、多く俳優中の才のあるもので、世の中の一般は、狂言芝居の俳優を重んずるに反して、作者を輕蔑し、其の脚本の文學作物たるを覺らない風習でありましたから、小說や淨瑠璃の作者の樣に、待遇して呉れませぬ。從つて、專門の名家の、之に身を委ねるものゝ無かつたのも無理はありませぬ。此の氣運は、私共の此の頃まで引きつゞいて居りましたが、これは、戲曲の價値を知らない、無敎育者の見解であります。それはさて置き、當時、近松以外に、近松と合作の榮を擔つたる金子吉左衛門といふ、俳優兼作

奈河

並木

者がありまして、脚本の準備を精しく爲はじめたといふ事です。其の外、富永平兵衛、水島四郎兵衛、福岡彌五四郎、吾妻三八、江戸には、河原崎權之助、明石清三郎、中村清五郎などありましたが、いづれも俳優の片手業で、獨創の文學的傑作はありませぬでした。其の後、別に作者あつて筆を取つたものは、淨瑠璃作の衰へて來た、寶暦明和の頃の奈河龜助などを始と致しませうか。大坂の作者でありまして、其の作には『競伊勢物語』『伊賀越乘懸合羽』『鏡山廓寫本』などが有名であります。其の弟子に、奈河七五三助、その弟子に篤助、そのまた弟子に晴助、本助などがありましたが、名作と覺しきものはありませぬ。奈河の他面に、寶暦明和頃に、並木正三といふがあります。彼は、淨瑠璃作者並木宗輔の門から出て、始は淨瑠璃をも作しましたが、後專ら狂言作者となつて、數十の作を出しました。就中有名なのは『日本一和布刈神事』『桑名屋徳藏入船噺』『三十石艪始』などで、特に『宿無團七時雨傘』は、殆ど知らぬものゝ無い程であります。その門に、並木五瓶といふがあります。これも名作家で、上方の作風を江戸に傳播したと申します。其の作は百にも上りますが、傑作としては、

正本屋

津打

五大力戀緘『金紋五三桐』『平井權八吉原衛』『隅田春妓女容性』などであります。其の門に、二代五瓶、三代五瓶があつて、江戸に於いて作をしましたが、取りいでゝ言ふ程のがありませぬ。初代五瓶と同時に、辰岡万作といふもありました。それから淨瑠璃作者で有名な近松半二の門に、近松德叟が出て、多く小說を脚本に改作する事を爲しましたが、世話を作つたものでは『伊勢音頭戀寢刀』が有名です。外に、西澤一鳳といふがあります。これは、淨瑠璃作者の西澤一風の孫で、正本屋利兵衛といふ書肆でありました。自分も、馬琴の八犬傳を取つて、『花魁婁八房』などを作した外、從來寫本でだけ傳つて居た臺帳を、芝居の正本と名づけて出版し、天下に公にする事となしましたのは、功勞あることと云はねばなりませぬ。

さて、江戸の作は如何かと見ると、上方の進歩は江戸を導き、江戸の發達は上方を引き付けた事は勿論の事で、或點までは其の歩調をそろへたのでありますが、特に江戸の作者として、名ある數人を擧げて見ますと、俳優と作者と分業して、作者中興の祖と云はれたのは、津打治兵衛であります。其の弟子に

堀越　櫻田　瀬川　鶴屋

二代目があり、同じ頃に藤本斗文がありますが、殊に注意すべきは、俳優の門から出た堀越菜陽でありませう。芝居の場立てを巧にし、演劇に淨瑠璃を隔和したのは、大に此の人の力によると申すことです。明和九年に沒しました。其の門に、櫻田治助を出しました。彼はもと、津打治兵衛の弟子で、當時、大坂の並木五瓶と並び稱せられて居りました。之に二代三代あり、又多くの門人もありますが、言ふに足りませぬ。外に名あるものは、瀬川如皐と、鶴屋南北とで、共に俳優でありましたが、南北は演者の菊五郎と相待つて、怪談物の作に名を得ました。誰も知つてる『四谷怪談』は其の一であります。其の門からは勝、松井、河竹などの代々を出し、外に三升二三次、手島新造などありますが、明治の此の頃までに、舊劇に於いて名家と云ふべきは、數年前に沒した、河竹默阿彌翁でありませう。近年、福地翁が歌舞伎座の立作者となつて、今古の脚本を出し、尙、各座にも、それ〳〵座附の作者があつて、燒直を司つて居る樣に見受けられますが、小說が戲作の套を離れ、新躰詩が貴族趣味を脫し得た樣に、まだ狂言が新面目を表じて參りませぬ。或は、新演劇と唱へる連中が、新作小說を脚色したり、新聞種を上場したりするが、興味が人を驅る事の外には、殆ど戲曲の諸約束を充してるものが尠く、當年の『忠臣藏』『先代萩』を凌駕する程の勢力あるものゝ全く無いのは、誠に遺憾な次第ではありませぬか。これには種々の原因理由もありませうが、濟々たる多士の今日照代に、此の一憾事は、心あるものゝ到底觀過する事の出來ない所であります。私は、決して德川期の最も發達した演劇なり脚本なりを、完全したものと言ふのではありませぬ。明治の新演劇新脚本には、尙非常の考ふべき點がありませう。文學としての內容形式、美術としての舞臺面の組織構造、音樂の俱伴、或は分離所作科白の撰擇など、幸に西洋各國の演劇の數々を、參照し鑑賞する事の出來る今日であれば、充分の用意を以つて、此の大事に當るべきであらうと思ひ、且つ希望して居ります。要は、相對的に京阪江戸の人氣芝居に比較すべきものを、私共の今日にあらしめたく、近松や馬琴の筆に相當すべき脚本文學、文學者を、明治の現今に欲しいと云ふのであります。其の手段の第一としては、やはり從來の我が演劇の歷史に通じて、發達の方針、趣味の性質、成敗の跡等を心

注意

得て、扨て今度新らしく顯れ出づべき演劇は、どうなければならないか、外國趣味が如何に融合同化させられねばならないか等を、無意識的乍らも心の底に考へなければならないのてあります。どんな大改良ても、歷史的修養を顧みない所業は、よしや一時の成功はしても、それは所謂付け燒刄て、忽ち脆くなまつて仕舞ふものて、古今の經驗はよく之を證明して居ります。まじて趣味の問題に至つては、更に其の性質の頑固な、齒に衣着せぬのは、固よりの事てあります。講義はこれだけにしておきます。

前以つて御通知して置きました所ては、我が國文藝の消長に、三つの大なる傾向がある。大躰に於いて、我が國の文藝は、三つの形式から批評し、亦說明し得るとの事に付いて御話して見やうと思つて居たのてありましたが、時間が無いのて其の事は申述べることが出來ませぬ。後日、何か講演が、或は論文かて、是等の事を申し敘べて、御目か御耳かに入るやうにすることがあらうかと思つて居ります。それまて暫く御預け置きを願いたう存じます。

是迄私の述べた文學史論中には、餘りに私の一家言に失した所が、澤山あらうかと存じますから、私の申した所が、何處までも宜いものとは保證が出來ませぬ。亦諸君もさう盲從して、唯私の言つた事は、何處までも確かなものてあると御信じになつては、私は眞に慚愧に堪へませぬ。私が斯う思つて居るが、諸君は如何てござると云ふ態度を執つて、御話したのて、又日々に研究を新にする考を持つてるのてありますから、諸君も、今、私の申上げた所を參考として、更に研究を進めらるゝか、或は他の方の研究と、私の說とを御比較下さるかして、實際的方面ては、完全なる文學の發達と云ふ事を、又、理論的方面ては文學史の研究の圓滿と云ふことを御心掛け下さる樣偏に希望するのてあります。長い間駄辯を弄しまして相濟みませぬ。

（完）

日本文學史論 終

明治三十七年三月十日印刷
仝　年三月十三日發行

日本文學史論與附
定價金九拾錢

著者　鈴木暢　嘉
東京市神田區裏神保町九番地

發行者　合資會社　冨山房
仝所社長

代表者　阪本嘉治馬

印刷者　森潤二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社　秀英舍第一工場

不許複製

發兌元　合資會社　冨山房
（明治廿九年六月設立）
特（電話本局一〇三六番）電信郵號（ヤマブ）

東京所賣販約特書圖版出房山富社會資合

▲特約販賣規則御入用の方は郵券貳錢封入申込まれたし▽

▲出版圖書目錄御入用の節は御申越次第進呈可仕候▼

東京麹町區　文學堂
全　播磨屋
全　岡崎屋
日本橋區　林平次郎
全　齊藤友三郎
全　富山房
京橋區　東海堂
全　黑田明文堂
京都寺町西　松田庄助
全　瓦林茂一郎
全　小林弘文堂
全　若山富之助
新潟縣　坂根榮正堂
大阪東區　吉岡平助
全　盛文堂
全　三宅莊藏
全　池田町　鶴川勢堂
北海道札幌　富士振堂書店
全　一貫堂
全　磯一郎
全　南重文堂
全　上村富廣文堂
全　久弘堂
全　川崎大師
全　小林
熊川
全　第一集有隣堂
全　吉岡支店
全　日下部藏房
全　東之館
千葉縣　福浦文之
全　成錦堂
全　中井正吉
全　竹木作
全　內村
全　井伊八次郎
明石　宗吉
全　松岡
全　目黑
覺張　安田
全　石田
福井　虎興
長崎縣佐世保市　黑澤治十郎

全　水原書店
全　高田屋
全　新潟田
全　萬松堂
全　齋藤治吉
全　一ノ木戸
小千谷町　山野吉
全　島本修三
全　佐藤書店
全　桑作
全　柿村卯之吉
全　北光社
全　長浦一郎
全　松堂支店
全　木村
全　高野幸吉
全　長島一郎
全　伊藤音五郎
全　西山儀八郎
全　煥乎堂書店
全　煥乎堂支店
全　竹內藤吉
全　文江堂
全　多田屋木支店
全　平野正文堂
全　朝日屋常吉
全　立澤捨次郎
全　坂入門十郎
川沼又藏
全　伊田銀助
全　寺井清兵衛
全　大鯨茂三郎
全　富山石塚日新堂
全　明新堂
宮內
全　新田々文
東瀨木悟
書店代宇助
全　四橋村六平
全　高田書店
全　橋本書店
全　齋藤治吉
全　松堂支店
全　島本修三
全　山野書店
全　佐藤書店
全　高橋儀作
全　村上書店
全　三輪文次郎
全　吉見書店
全　谷陽社
全　澤安太郎
全　古澤太三郎
全　滝治三郎
全　木滝文進堂
全　別所藤四郎
伊藤清太郎
全　鶴柳玉堂
全　桐谷
全　柳澤正
全　微古堂
全　吉田平作
全　廣田七次郎
全　叉川庄次郎
全　郁田幾三郎
全　堀下文太郎
全　西澤原朝陽館
全　荻孝堂
全　水野喜太郎
全　松本
全　高橋榮堂
全　鶴美書
全　明倫林堂
全　新日坂堂
全　宮田松造
全　堀田市兵衛
全　中屋七郎兵衛
全　上田市兵衛
全　福澤文吉堂
全　岩崎祐之助
全　藤下俊吉
全　鈴木榮三郎
高藤書店
全　榮堂分店
玉榮堂
荒井陽文堂
上野屋書店
成瀨忠左衛門

全　石川巷雪一ノ國
全　國市
全　一ノ瀨
背森弘蔵
全　小港文堂
全　黑澤平
全　廣岩文
全　手通信社
今泉道次郎
全　近松書店
全　今泉支店
全　伊南堂
全　浦山書店
全　野德太郎
全　曙堂
全　牧野
全　遠藤書店
全　白崎善助
全　日向源吉
全　風間五右衛門
全　大泉善助
全　成藤兵衛
全　遠藤清兵衛
全　大島常三郎
全　開成堂
全　藤林本店
東海
全　吉田政五郎
全　中村六三郎
全　日新館
全　晶川書店
全　宇都宮源平
全　近藤太三郎
全　中田清兵衛
全　福田市
全　學海堂
全　木久松堂
全　鳥旭
全　伺山榮堂
全　有邊共榮堂
安田理助
全　板倉四郎
森博文堂
武內三郎
仁奧科田金正堂書店

積善館支店
全　東四堂
全　中村貫誠堂
全　小原松千代
全　桂山陽堂
全　銀支店
全　白田銀
全　村伊兵衛
全　川梅龍堂
全　藤井東軸
全　宮宗兵衛
全　黑江崎
全　入橋文舍
全　宮脇仲次郎
全　北村綱市
全　向井肥藏
全　土肥典次郎
全　中野翠堂
全　大駒吉
全　澤本
全　穗積善館支店
全　菊竹書店
全　佐田博文
全　野中幸次郎
全　長平七郎
全　甲斐治平
全　梅津壯
全　河井內平
全　平井惇信堂
全　坪川德次郎
全　牧野融貫堂
長津田
全　坂田
吉永
久金宰光堂

富山房最近出版圖書目錄

文學士　長谷川福平先生著（新刊）

古代小說史

洋裝菊判　定價六拾錢　郵稅八錢

本書は平安朝より室町時代の終に至る全小說を次第して之を評論し、且つその妙處を擧ぐ、收むる所約百種。附錄として現存せざる小說の名約三百種を掲げたり。小說を讀む人、書を人、及び文學に志ある人は何人も一讀せざる可からざる珍書なり。

文學士　鈴木暢幸先生新著

日本文學史論

全一冊　三百頁　近刊

著者專攻の學識を傾瀉して大成したるもの、所說の明快、論斷の適確、文辭の暢達共に相映發して光彩陸離、我國文學界最近の異彩とは是れ。

校訂編纂　近刊諸註集成　國文定本

（姓名五十音順）

文科大學教授　文學博士　上田萬年先生
女子高等師範學校教授　關根正直先生
文科大學教授　文學博士　萩野由之先生
高等師範學校教授　芳賀矢一先生
松井簡治先生

國文學の異本を校定し、諸註を大成す。明治文學界の一大編著なり。

第一輯　竹取物語……芳賀矢一先生
伊勢物語……萩野由之先生
大和物語……松井簡治先生

第二輯　枕草紙……關根正直先生

第三輯以下收むる所國文學の全般を網羅す。

黑川眞道先生輯　珍籍集覽　# 古物語集

紙數凡壹千五百頁

多くの珍らしき古物語を輯む。國文學界唯一の珍書なり。

芳賀博士著　# 國文學上古史　近刊　全二冊

葉山學士著　# 獨逸國民文學史　近刊　全二冊

萩野博士著　# 名物字彙　近刊　全二冊

小說 巴黎の秘密

全一冊

佛國ユーゴー著
原抱一庵主人譯

シュー氏「巴黎の秘密」は世界文學の奇觀にして洵にユゴー氏「哀氏」以上の作なり、今や同情遠く神祖遠き主人の筆を以て遺憾なく之を譯出せらる。曩に主人に「聖人か盜賊か」の譯あり、文界一時の盛を極めたりと雖もその經營慘憺の勞はそれ寧ろ彼に十倍せりと以て本書の價値を知るべし、

洋裝美本●泰西名家挿畫孟二葉
其他諸大家畫入印刷中

草もみぢ

故尾崎紅葉先生遺著

新意匠五六判頗る美本
定價金五十錢
郵稅金四錢

故紅葉先生作る所の小說長短凡百篇。而して其閑筆に成りしもの若干篇。今や散佚して尋ぬべからず。近頃幸に篋底故紙堆中を搜りて、叙文紀說の類より漫筆雜俳の末に至るまで、約數十章を得たり。取りて檢するに先生の多技多能なる、文章に於て爲さゞるなきを見るに足る也。先生又座談の別才を以て聞ゆ。意ふに本篇は正に其の話說の題目百端、今猶快舌風生の席上に先生が音吐の琅々を聆くが如きものならん乎。

俳諧新潮

十千萬堂紅葉先生著

百七十餘頁

四六判洋裝美本　用紙舶來光澤紙

定價金廿八錢
郵稅金四錢

十千萬百句

齋藤松洲先生畫

故紅葉先生の俳句百首を撰み之に特意の畫筆を染色せるもの雅人必讀の書也。

故橘曙覽大人中に一頭地を抽てられたるは世人の知る所也。故正岡子規は之を評して實朝以下一人といへり其集志濃夫廼舍歌集刊本極めて得難し此度同歌集の外長歌集、文集、歌論、

橘曙覽全集

全一冊

故橘曙覽大人肖像寫眞入
郵稅金拾錢

定價金七拾錢

隨筆、紀行等を蒐め全集として出版す大人の面目此書によりて始めて躍如たるを得ん歌人文學者諸君の一讀を希ひ奉る

菊判紙數五百餘頁

故橘曙覽大人先生編輯校訂
齋藤松洲先生畫

支那文學史

全一冊　菊版洋裝
定價金壹圓八拾錢
郵稅拾四錢

日本支那諸名家題字詩及序
古城貞吉先生著（訂正再版）

目次大要
第一章緒論○第二章支那文學の起原○第三章諸子時代○第四章漢代の文學○第五章六朝の文學○第六章唐朝の文學○第七章宋朝の文學○第八章金元間の文學○第九章明朝の文學○第十章清朝の文學○第十一章餘論

文學博士　上田萬年先生著（三版）

國語のため

全一冊　菊版洋裝
定價金六拾五錢
郵稅六錢

文學博士　芳賀矢一先生講述（第五版）

訂正改版 國文學史十講

全一冊　菊版洋裝クロース
定價金七拾五錢
郵稅拾錢

洗練平易なる言文一致を以て上下三千年の國文學を縱橫に說破せる初版發行以來好評喝々今回新訂を經て第五版發行文學研究者必讀の書也

文學博士　芳賀矢一先生講述（新刊）

國學史概論

全一冊　菊版總クロース美本
定價金五拾錢
郵稅六錢

文學博士　上田萬年先生著（最新刊）

國語のため 第二

菊判二百餘頁
定價六拾錢
郵稅八錢

文學博士
文學博士　上田萬年先生閲
金澤庄三郎先生著（訂正再版）

ことばのいのち

全一冊　菊版洋裝
定價金貳圓
郵稅四錢

文學博士　上田萬年先生著（訂正再版）

作文教授法

全一冊　菊版洋裝
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

文學士　保科孝一先生抄譯（第二版）

訂正改版 言語發達論

全一冊　菊版洋裝總クロース
定價金六拾五錢
郵稅六錢

清國碩儒吳汝綸先生題辭
第五高等學校教授見島獻吉郎先生著

漢文典

全一冊　洋裝菊判
定價金七拾錢
郵稅八錢

第五高等學校教授見島獻吉郎先生著（再版）

續漢文典

全一冊　菊版
定價金六拾五錢
郵稅八錢

京都府師範學校教諭岡島安平先生著（最新刊）

中等漢文典

全一冊　菊版洋裝上製五拾錢並製四拾錢
定價
郵稅六錢

文學博士上田萬年先生序
富山房編輯部編纂

和漢名數

五十韻引

全紙數二百十餘頁 定價金參拾錢 郵稅金四錢（再版）

文學博士上田萬年先生著

西洋名數

五十韻引

全紙數約二百頁 定價未定 郵稅四錢（新刊）

前者は專ら數に關する、若くは數字を冠して成れる和漢熟語の辭典也。後者亦數に關する若しくは數字を冠して成れる和洋熟語の辭典也。何れも僅々二百頁の小冊子と雖もその包含する所五車も啻ならず。歷史國漢文及外國語の研究者は勿論、何人も一本を座右に備へて便也。

宮崎三味先生編輯校訂

隨筆叢書

全六冊 近刊

坪内文學博士閲 杉谷代水先生譯補

希臘神話梗概

近刊

▲希臘神話は西歐文藝の源泉也ホーマア、エジオット等の叙事詩に始りウアエル、アンセロ、沙翁、ダンテ以下の文學美術に出入せる事數數ふべからず今多端の神話中最も要を得たるボ氏の著を增譯し詳註を加へて上梓せんとす譯筆また銑錄の美文也

長谷川辰之助先生譯

けむり（ツルゲネイフ）

近刊

▲二葉亭四迷先生久々にて此雄篇の譯を示さる「けむり」が露國の金色夜叉か金色夜叉が日本の「けむり」か、巽工同曲、休惟、愛とダイヤモンドの比較は千古の去就問題なればなり。

故文學士草野清民先生著（再版）

日本文法

菊判紙數三百餘頁 定價金一圓 郵稅十錢

文學士和田萬吉先生著（文部省檢定濟）

新撰國文典

菊判紙數三百餘頁 定價金七十錢 郵稅八錢

藤井錢先生著

日本文典

菊判紙數三百餘頁 定價金九十五錢 郵稅十錢

文學博士芳賀矢一先生校閲
三土忠造先生著（文部省檢定濟）

訂正改版

中等國文典

全三冊 定價各金廿二錢 郵稅各四錢

前高等師範學校教諭 阿保友二郎先生著

訂正

文章添削方針

全四冊 本定價各廿八錢 郵稅各四錢 全部目方四百匁

文章添削の方法詳解せしもの和學文を學ぶの士座右必ず一本を備へよ。

文學博士 上田萬年先生著 近刊

言語學集成

文學博士芳賀矢一先生著 近刊

國民性十論

樂眞子 池田晃淵先生著（三版）

大奥の女中

大和紙美本極彩色口絵入全三冊
定價每冊金壹錢郵稅各六錢

文學士遠藤隆吉先生著

支那思想發達史

菊判七百頁 定價一圓五拾錢 小包十錢

上下茫々五千載、支那思想發展の跡を辿ねれば、興會頗くが如く趣味盡きざるもあり。著者專攻の學識抱負を傾倒し來り之を組織的に叙述論評す、彩筆燦發、光芒陸離、之を哲學史と見る固より大に可、一種の文學史、文明史と見る又固より不可なきなり

文學博士坪内雄藏先生校閲
坪内鋭雄先生著

文學研究法

全一冊 定價十錢 郵稅八錢

本書は文學の本領●價値●種類●諸要素等を初め、詩歌●小說●脚本等の研究法を論じ、批評の眞義を辨じ其の他詩文研究に必要なるあらゆる事項を縱横に論じて餘蘊なし。

文學博士芳賀矢一先生著

世界文學者年表

定價未定 郵稅未定

近日發行

北海道教育會編纂（口繪寫眞入）（四版）

家政學講義

下田歌子先生

［附女子教育講話］

紙數四百餘頁　定價四十五錢　郵稅八錢

この書は女の務むべきこと守るべきこと一家を整へること人を使ふこと衛生、育兒、看病、交際、料理、家事經濟の事その他一般女子に必要の事が分り易く而白く假名つきて記したものである。

故横井玉子女史著（寫眞版八葉入）（三版）

家庭料理法

菊判三百餘頁　上製金六十錢　並製四十五錢　郵稅各八錢

三度〳〵の食物を安く旨く且つ輕便に味はんとするには、一通りの料理關係を心得置かざるべからず。本書は故横井玉子女史が多年の經驗上より、四季折々の日本料理、西洋料理もしくは、折衷料理など、有合せの器具にて購ひ易き原料を用ひ、好むがまゝに試み得べき最も輕便なる諸種の調理法を極めて親切に通俗に詳記したるもの、固より坊間濫出の料理書類とは其選を異にす、蓋し一般家庭に於ける厨の寶典也。

志賀重昂氏序　新治吉太郎氏著（第三版）

通俗家庭教育

定價五十錢　郵稅六錢

子女ある家庭は必ず本書一本を備へざるべからず

法學士　持地六三郎先生著（四版）

經濟一夕話

菊判百五十頁　定價卅五錢　郵稅六錢

本書は經濟界に於ける現象作用の大要を日常見聞の題目につき平易通俗に解說したるもの、何人も之を讀み得べく、亦何人も一讀せざるべからざる寶典也。

東京鐘淵病院長　橋本善次郎先生著（再版）

衞生一夕話

菊判百五十頁　定價卅五錢　郵稅六錢

本書は現在の衣食住の上より何人も注意すべき何人も守らざるべからざる一般衞生の心得を說きたるもの也。されば必らずしも專門に流れず主と學理と實際との調和を謀り、並に最も行ひ易き衞生的生活を開拓し、普く衞生思想の涵んずべき事を知らしめんと期したり。蓋しその都會に生活する者と田園に生活する者とに拘はらず。苟も幸福なる人生を樂まんと欲する者の必讀書とは是れ。

法學士　桐生政次先生著（最新刊）

法制一夕話

菊版百五十頁　定價卅六錢　郵稅六錢

文學博士　坪内雄藏先生著

通俗倫理談（四版）

菊判紙數五百餘頁　定價金壹圓貳拾錢　小包郵送料金十五錢

◎本書は、坪内文學博士が、最近四年間に就いて、專ら中學程度の少年の爲めに物せられたる倫理談を、輯めて一册子となせるもの也。自序に曰く、「世の少年が修身處世の上に何等かの參照たるを得んか、著者の本懷なり」と。されど世の倫理教育の事に從ふ人々、はた必ずや此の穩健なる、且つ時勢に適切なる所說によりて裨益する所多かるべきなり。

目次

上篇　大和魂の精髓▲孔子とソクラテス▲理想と云ふ語の意義▲東京專門學校の學風▲武藝と文藝▲刺客論▲萬歲一遇の時機▲我が思想家の迂弊▲當來の事業のあらまし▲當來の娛樂

一、人になる法▲其の二、豪傑になる法▲其の三、男の三大別▲其の四、偉人の三つ道具▲其の五、自主獨立の解▲其の六、戀（不自欺と不欺他）

少年訓

四、惡の標準▲第三回、善惡の根は何ぞ▲第四回、善の分析並に絕對の道德▲第五回、愛の分析▲第六回、性の單複を論ず▲第七回、自衞性と社交性▲第八回、社交性の作用に基く善惡と惡德と惡行の分析▲第九回、善惡の是認せらるべき場合を論ず▲諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず▲馬骨人育▲帝國文學記者に與へて再びニイチエを論ずる書

下篇　馬骨人育に序す▲匿名の動機を論ず▲諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず▲馬骨人育▲帝國文學記者に與へて再びニイチエを論ずる書

倫理入門講話

第一回、惡の根は何ぞ

修身奉公訓の表

◎中篇　隨時

文學博士　松本亦太郎先生

『メモラビリア』譯者

『東洋倫理學史』著者

木村鷹太郎先生共著（三版）

プラトーン全集

全四册

第一卷本年九月下旬發行　紙數每册大約千二百頁　印刷鮮明紙質良好　製本高尚優美

（第二卷以下續出）

これ眞に善に美に愛を網羅したる大理想を表白し天地萬象及人事を解釋せんとする大思想なり政治學も文學論も美術論も愛情論も教育法も皆茲にあり。國家論、社會主義、詩文學、論理學、言語學、修辭學、神秘論、實体學、倫理學、實驗主義、心理學等、一切のもの殆ど「プラトーン」中に在らざるなく古來の大家始ど「プラトーン」に負はざるものなく耶蘇の主義、佛教の主義、科學の主義、英國的なるもの、獨逸的なるもの、ローマ的なるもの、日本的なるもの、凡ての物殆と在らざるなく、「プラトーン」は宛然一個の小世界なりといふべし。宜なり、マホメットの徒が自己の經典コーラン以外の一切の書を燒き棄つるに當り獨り「プラトーン」のみは之れを保存して大に之を頌美したるや。本書叙述の体裁はドラマ的にして詩趣津々以て青年の高尚なる慰樂の書となすべく、その含蓄せる哲理に至つては大思想と雖も大なる益を得べき也、其思想の豐富なる其理想の高尚なる、其文章の美麗なる、凡てに於て世界第一等の書といふべし。

合資會社富山房編輯部編纂

言文致普通學全書

高等小學卒業程度の學力て普通學の全般實業家須知の諸課目を理解獨修し得るもの

定價 毎冊金廿錢▲五冊九拾七錢▲十冊壹円九拾錢▲廿冊三円六拾錢▲全部書用五円廿五錢▲郵税毎冊六錢宛

袖珍名著文庫

文學博士 坪内雄藏先生 監督
文學博士 坪内雄藏先生 閲校
青年諸名家執筆

詩歌小説戯曲史傳記行隨筆雜論等毎編國文學に關する珍本稀籍を網羅す

定價 毎冊廿錢▲六冊壹円拾四錢▲十二冊弐円廿二錢▲廿五冊四円六十錢▲五十冊九円▲百冊拾七円五十錢▲上製一冊八錢增▲郵税各編同編

通俗世界文學

文學博士 坪内雄藏先生 監督
文學博士 坪内雄藏先生 閲校
青年諸名家執筆

世界に於ける古今文學の傑作をば最も清新なる筆を以て案排縮寫し紹介したるもの

定價 毎冊金廿錢▲六冊金壹円拾四錢▲十二冊金弐円弐拾三錢▲廿五冊金四円六十錢▲全部五十冊金九円▲郵税一冊二付金六錢宛

健全にして有益なる家庭の好讀物、趣味教育に資すべき現代唯一の少年讀本

定價毎編金拾貳錢郵税毎編金四錢

少年世界文學

青年諸名家編著

自然界に於ける最も興味ある事柄を最も巧妙なる談話體を以て解説したるもの

定價毎編參拾五錢▲六冊金二円〇四錢▲全部二十四冊金四円▲郵税一冊二付金六錢宛

博物叢書

理學博士 石川千代松
理學博士 三好學兩先生 合編

農に關する須知の事項を網羅す農業國に生れたる國民は必ず一讀せよ

定價 毎冊金廿五錢▲郵税一冊二付金六錢宛▲六冊金壹円四十錢▲全部十二冊金弐円七十錢

言文致農藝叢書

農學博士 横井時敬先生著

日常目擊する所の興味ある理化的事項を最新の學理により通俗的に面白く分り易く講述したるもの

定價毎冊廿五錢全部十冊金二円廿錢郵税毎冊四錢

日用理化叢書

博士學士諸大家校閲
梅山信順先生講述

45
356

45
356

084972−000−8

45−356

日本文学史論

鈴木　暢幸／著

M37

DBB−0362